# 幼年期―郷原直太の場合・其の壱　じっけん（前篇）

中村太郎

【一】

とにかくよく壊す子供だった。

おもちゃ屋の店先で買う買わぬのひと騒動、ようやくねだりたおして買って貰った玩具も大抵ひと月とはもたなかった。一週間や十日はもっても、半月経てばどこかしらおかしくなる。するとあとはもうガラクタへの道を辿るばかり。修繕してなおる見込みも無い代わりに未だ捨てるに捨てられず、生殺し。そうしてその子のおもちゃ箱の中には、惨めな姿のおもちゃたちが無造作に放り込まれ、雑然と積み重なっていった。

名を郷原直太という。

丸々と太った赤ん坊がそのまま相似形で幼児に育った。躰つきはもちろん丸い顔の目鼻立ちも含め、全体があどけなくて愛くるしい。それも都会風の端整な顔立ちとは逆に、いかにも鄙の里に育つ男児らしく野趣に富んだ顔立ちで、片言を話し物心つきはじめてなおいっそう、乳くさい印象を見る人ごとに与えた。

よく壊す子供とは、他ならぬこの直太のことである。それならその乳くさげな外貌の下に存外荒々しい、粗暴極まる破壊的な資質でも隠し持っていたというのかというと、けっしてそうではない。昭和も四十年代頃になると、玩具製品でも合成樹脂製の大量生産品が大量に出まわり、それらのうちには廉価なぶん壊れやすい粗悪品も多く含まれていたろう。

で、肝腎の直太はというと、粗暴などころかむしろ物に感じやすく、純情一途の生一本。そんな無邪気な質が見る人を、なにか無性に放ってはおけぬような気分にさせるのだった。四歳になって通いはじめた幼稚園で出逢った同じ年頃の子供たちの中にも、母性本能を刺激されたのか自然と、何くれとなく面倒を見てくれる女児がいた一方で、嗜虐性を刺激されたのか、理由も無く小突いたり撲いたりしていじめて来る男児もいた。

その他、要領が悪くて不器用で、細かい作業が大の苦手。折り紙の折り目がどうしても歪んできちんと折れずに、それでも幾度となくやり直すうち、最後には皺クチャになってしまう。それが悲しく、ひとりでに泣けて為方がないのだった。

幼稚園の話となると、最初の頃は毎朝のお迎えがやって来る度に泣き叫んでバタ狂うては先生の手を煩わせ、登園拒否の抵抗を繰り返した。幼稚園に着いてからも暫くは、周囲と

容易には打ち解けず、憂鬱そうにめそめそ泣いていた。惰弱といえば惰弱だが、頑固といえば頑固な子供だった。
そのくせ、帰宅して来て家で独り遊びに興じる段になると、そこは内弁慶の面目躍如で俄然精彩を取り戻す。買って貰ったおもちゃばかりか、彼の好奇の眼に留まり気を惹く物なら何でも、手当たり次第に玩弄した。そうしていいかげん弄繰りまわすうち、ふと気がついたときにはどこかしらに不具合が生じ、使い物にならなくなる物も珍しくなかった。
よく壊す子供だというのは、つまりこの事だ。
物という物たちが、直太の手で玩弄されているうちにどこからか変になってきて、壊れたり正常に機能しなくなったりするのだ。最初からそうなるべき宿命だったかのように。直太としては殊更に壊そうとする意志も無い以上、
――物がひとりでに自ずと勝手に壊れていったような感じ。
それが偽らざる感覚なのだった。

直太は父方の祖父母が初めて授かった男の内孫だった。そのせいか、祖父文蔵が可愛がり様ときたら尋常ではなかった。直太を溺愛が上にも溺愛し、それが最晩年を迎えていた文蔵が生涯の最後に辿り着いた生き甲斐だった。
そんな文蔵も、胃に病魔が巣喰うとわかったときすでに遅きに失した観があり、開腹手術を受けてもほとんど為す術無く、術後一年とはもたずに身罷った。直太四歳、幼稚園に通いはじめた年の晩秋の出来事だった。しかし短い歳月ではあったが、文蔵は直太を甘やかせるだけ甘やかした。
古希の祝いを二三年前に済ませた文蔵は、直太が二歳くらいのよちよち歩きのうちからよく、
「じいちゃんとあんよして来うかね、直太。ほら行くぞ、直太、あんよ、あんよ、あんよ……」散歩と称して行く先々へと連れ歩いた。
干潮時には見渡す限り泥海の干潟となる内海のほとりに開けた鄙びた小さな城下町――。人々がその街の名に「水郷」という枕詞を冠して呼んだのは、街ぢゅう隈なく廻っている「掘割」と呼ばれる人工水路にちなんでの事だった。それぐらい掘割とは切っても切れぬ縁ある街の、気の合う旧友たちが住まう辺り――国民詩人が旧制中学時代にそこを通って登校したのにちなんで「白秋道路」の名を以て親しまれていた――の水辺の散策路を、散歩日和には幼い直太の手を引いてぶらりぶらりと漫ろ歩きする文蔵の姿が見られた。
文蔵は、若い頃には柔道で鍛え上げた元警察官で、古希に達しても中肉中背ながら骨太の頑丈そうな躰つきをしていて、
「じいぢゃん、がっご……！」
幼い直太が歩き疲れて抱きついてゆくのを、
「おオ直太、抱っこね、ハイ抱っこ抱っこ――」
軽々と抱き取って歩けるだけの体力を保っていた。だが、文蔵に手を引かれたよちよち歩きの直太は黙々とよく歩いた。
「おうおう、直太はほんにあんよが上手じゃん……」
文蔵は親バカならぬ祖父バカぶりを発揮して上機嫌、調子

っ外れな鼻歌を口ずさみながら歩いて行くうち大抵、友人知人と出くわした。彼らも楽隠居の身分らしく、堀端を漫ろ歩きしてみたり、所在なげに自宅の前の庭か路傍で日向ぼっこしていたりした。そこへ文蔵が直太を連れて通りがかると、「おろッ、そこばさるきょんなっとぁ（そこを歩いて行きよりなさるのは）、文ちゃんじゃなかの？」退屈しのぎには格好の相手を見つけて、「孫につんのうて（付き添って）の散歩ちゃ結構な事ばってん、ちょっと休憩しに寄って行き召さんかんも（寄っておいきなさらんか）。はア、うちに寄ってお茶ぐらい飲んでったっちゃ晩酌迄にゃ、まぁちぃったぁ間のあるばんも、のォ、あなっつぁん（まだすこしは間がありますよ、ねえ、あなたさん）――」

文蔵は、この城下町のその名も鍛冶屋町に代々続いた鍛冶屋の三男坊として生を享けた。日清・日露二度の戦争に挟まれた時代の事だ。長ずるに及んで、かつて詩人白秋も少年時代に通った旧制中学で、藩校の流れを汲み当時もまだ士族の子弟が多く通った、伝習館というのに学んだ。そこを卒えて上京し、苦学して東京の私学に通い、警察官の職を得た。やがて縁あって妻の久代を娶った後に台湾へと渡り、総督府に奉職して彼の地で一家をなした。

そうして外地で過ごすうちに、国家的野望からなる膨張政策が日中戦争へと、その泥沼化が尾を引いてさらに太平洋戦争へと発展していった。その国家の暴走が招いた戦争が自国の主権さえ失う悲惨極まる負け戦に終わると、地位も財産も身ぐるみ剝がされ、ただ妻子を伴って内地の故郷へと引揚げて来た。引揚げ船に乗り南シナ海を渡って、父祖の地であるその内海のほとりの小さな城下町へと帰って来たのだ。

久代とのあいだに五人の子をもうけたが、下から二番目だけが唯一の男子で、それが直太の父誠人だった。敗戦当時、文蔵はすでに五十路に達していて、台湾の国民学校で尋常科六年生だった誠人は、引揚げて来た先の父親の故郷で再度の小学六年生。外地生まれの転校生は、内地生まれの子供らから「台湾ドジョウ」とからかわれ屈辱も味わった。

台湾ドジョウとは掘割で増殖していた雷魚の一種で、大物は全長六七〇センチにも達し、蛇に似たグロテスクな柄の魚体を持つ貪婪な肉食性の外来魚だ。見栄えが悪いうえに寄生虫がいて、白身が美味だが生で食べると皮膚病に罹るといわれた。また鮒などの仕掛けにかかると猛烈に暴れ、釣り糸を縺らせたり切ったりする外道魚だった。さらに、おなじ淡水域に棲む在来種の稚魚を喰い荒らすので、食用に持ち込まれたのに地元での評判は芳しくなかった。つまりそのあだ名は、台湾からの引揚者に対する蔑称に他ならなかった。

しかし台湾で過ごした歳月は、国が無謀な戦争を始める前迄なら、支配し統治する側に身をおく者として比較的恵まれた豊かな暮らしを享受し得るだけの平穏の裡にあった。文蔵にとってそこで家族と過ごした星霜こそは、

――我が人生のハイライト。

ところが、国が完膚無きまでの敗戦で滅亡に瀕すると、も

う過去の追憶に浸って繁栄を懐かしむどころではなく、生活を懸け骨惜しみせずに働いた。すでに五十路に達した躰に肉体労働は堪えたが、生まれ育った土地の有難さは地縁血縁に恵まれ、「文ちゃん、文ちゃん……」で何かと世話してくれる旧友も多く居た。また、境遇を同じゅうする引揚者も少なくはなく、困ったときはお互い様で協力し合い生き延びた。ようやく人心地ついた後は、持ち前の兄貴肌というべき面倒見のよさ、元警察官としての正義感にくわえ清濁併せ呑む懐の深さを買われて民生委員を務めるなど、人望もあり顔も利いて第二の人生もまんざら捨てたものではなかった。

そんな文蔵が、旧友の誘いにも奥ゆかしく遠慮していると、「文ちゃんやん、良かやっかんも、あなっつぁん。俺とおなし事っで（同じことで）どうせ閑やろもん。寄ってお茶どん飲んで行き召さんかんも、のも（ねえ）」

三顧の礼、と迄ゆかぬが、まあとにかくこうして暫くは友の家の縁側で、時には客間や茶の間に招じ入れられ四方山話に花が咲く。古今の話題で茶話に興じるのは、文蔵にとっても愉しい時間の過ごし方ではあった。

が、文蔵の真の目的というか、直太を頻繁に連れ歩く動機の核心にはまた別の、切なる欲求が潜んでいた。

――可愛ゆうしてのさん（可愛くてたまらない）うちの直太ば、誰ンでん見せびらかしてやろうごたる（やりたい）！

だが、他人を鼻白ませる類のあけすけすぎる態度は、

――そげな下策っかつぁ（下品なのは）、俺ァ好かん。

だから、「直太のあんよ」にかこつけてさりげなく自慢したい、そんな魂胆あっての散歩なのだった。

糟糠の妻で、直太には祖母の久代には心許して、

「余所ン方の孫ちゅうたら、あんまし可愛ゆうもなかもんやなァ」しみじみとした口調でもらしたものだった。

器用な質の久代は、最近よく文蔵が胸やけがすると訴えるので、浴衣を諸肌脱いで腹這いに寝そべった夫の背中に療治のお灸を据えてやりながらも、

「はァ〜、あぁた（あなた）、今何ちいいなはったですか？」耳を疑って問いただした。

「うんにゃ、そりがくさん（いや、それがねえ）、うちン孫に比ぶっと余所ン孫てろんな、そげん可愛ゆうものうしてくさ、正直いうて、ちぃとひゅうなか顔（ちょっと変な顔）して……」

「かぁー、こン人のいい召す事っちゅうたら（この人のおっしゃる事といったら）、マア呆れた！　あぁたっちゅう人は、マア何ちゅう事ば……」眼鏡の下で目を白黒させる久代。

だが文蔵、悪怯れもせずいう事には、

「余所ン家の孫ば『お〜かしか面ばしとらすですなァ』ちゃ、まさか口の裂けたっちゃいわんばってん、うちン直太と美奈子ンごつぁ可愛ゆうものうしてくさん（うちの直太と美奈子みたいには可愛くもなくってさア）。そらお世辞のお愛想にゃ、『はあーこりゃ可愛か！　まぁちぃっと大きゅうなんなったら、子役の役者さんにどんなかすと良かろごたる（もう

すこし大きくなられたら、子役の役者さんにでもすると良いようだ）』てろん何てろん、巧い事いうちゃおくばってん、正直いうてそげーんまで感心すっごたる、ずうーっと眺めよったっちゃ見飽きんごたる御面相じゃあ、なか――」

よくもいったものだ。だが余所の家でも、どうせ逆の立場から同じような事をいっているだろうから、おあいこといえばおあいこなのだろうが。

しかし、久代は根っからの生真面目、謹厳実直を絵に描いたような女で、若干おもしろ味に欠け窮屈に感じられるところもあった。だから、文蔵の叩くたわいもない軽口くらい、――出た、また例の祖父バカの孫煩悩が！

その程度の事と聞き流しておけばよさそうなものを、一々真に受けて論うのだった。

「はア魂消った、こン人にゃ！　あぁたっちゅう（あなたという）人は、他人様ン方のお孫さんばそげんいうやら、まあ何ちゅう事ば……」文蔵の常識や分別というものに対して意見を差し挟んだ。

だが文蔵は、いよいよ悪怯れもせず、

「ばってん、ほんな事っじゃけんがら為様ン無かろうもん（ほんとうの事だからしょうがないじゃないか）」真っ正直であることのどこが悪いかとばかり開き直る。

「ぞーたんのごつ（冗談じゃない）！　そげな事ば家の外で、余所様ン前でどん口にしょうもんなら、あぁた、そっから先ゃ総スカンばくろうて世間の狭うなっですよ！」

「そげな事ぁ一々いわんでん、わかっとる――」

文蔵はムッとして、久代のくそおもしろくもない正論をさも煩げに手で払い除けるしぐさをした。その時、お灸の熱さが身に堪えたらしく、籐枕にしがみ付き咽喉の奥で「うううッ……」と低く唸ったが、久代の非難がましい言い草が癪に障って、むしろそちらが我慢ならぬ様子で、

「……わかっとるちいいよろうが、あア、せからっさ！」身動ぎしながら反感を示した。

そのくせ、お灸の療治が終わり、起き上がって浴衣に袖を通したときには、もう機嫌を直していた。そして、孫たちがしてみせるあどけない言動をでも想い起こしたのか、改めて、

「ばってん俺は、誰が何ちゅうたってやっぱし、うちン孫どめが、泣いたっちゃ笑うたっちゃ、ほんにむぞらしゅうてくさ、ええらしゅうて堪らんとたい――」

地の言葉で「むぞらしか」も「ええらしか」も、結局、いかにも可愛らしい、愛おしいことを意味した。要するに、文蔵が久代にもらした陰口には、彼が彼の孫を可愛ゆくおもう、そのあまりにも強すぎる愛情が邪魔をして、おなじ可愛い盛りとはいっても余所の子の可愛いさがちっとも身に沁みないという、ただそれだけの事。しかしそれにしてもとんだ親の欲目ならぬ祖父の欲目、子煩悩ならぬ孫煩悩もあったもので、祖父バカチャンリン、そば屋の風鈴……。

そんな文蔵の祖父バカぶりは、家の外の親類のあいだでも周知の事実となっていた。

列島の西の端近い北部九州のやや奥まったところに位置する辺鄙な在所にも、それ相応の規模ではあれ繁華な、商店街の体をなす一画があった。主に旧街道沿いに連なった小さな町々の、その表通りに面した家々は軒並み個人商店を営んでいた。どの家も大抵表が店舗で奥が自宅の、鰻の寝床の家々がほとんど隙間なく蝟集しているのだった。

その商店街の中にある一軒の洋品店には、文蔵の三女で、直太たちきょうだいには伯母にあたる人の嫁ぎ先があった。文蔵は直太を連れての散歩中に足繁くそこへと立ち寄った。すると、そこの家でも、

「直ちゃんないつ見たっちゃ丸々と良う太って、頬っぺたやらお餅ンごつぷくぷく肥えて、お目々はくりぃッとしてから、あアええらしかねエ、ほんにむぞらしか事！――」

伯母たち夫婦をはじめ伯父の母親、その一家に連なる縁者や馴染み客までが、直太をみると寄ってたかって褒めそやした。こうして毎度毎度、直太の愛くるしさを褒むるに言葉惜しみしない人たちからのお世辞やお愛想をおくられ、文蔵はまるで自分が褒められたかのように、否、それ以上にうれしげに、相好崩して喜んだ。それもそのはずで、直太を褒めそやす讃辞聞きたさ、ただそればかりを目当てに、知り合いの家を訪ね歩くのだったから。

【二】

直太にとって、祖父文蔵にまつわる想い出の中でもひときわ鮮明なのは、文蔵から買って貰ったチャンバラごっこ用の刀の記憶だった。

その刀は、後々想い出す度に、時を経るほどに、やすっぽくて、ちゃちで、その粗悪な印象が弥増してくる感じの、合成樹脂で出来たおもちゃの刀だった。直太は、そんな益体も無いような、駄菓子屋なんかにでも売られていそうなちんけな代物にいたく執着しては、文蔵が大甘なのをよいことに一本ならず二本三本と買わせたのだった。それでそうそうかんたんに忘られては、文蔵だって浮かばれまい。

その小さなおもちゃ屋は、二筋の旧街道が交わる四つ辻の角にあった。今風のショウウィンドウだのディスプレイだのとは無縁な、木の桟が古びて黒ずんだガラス戸を表通りに向けて建っていた。そこの店頭には、直太が目当てとする合成樹脂製の刀の、透明なポリ袋に封入されたのが、何本も鴨居の上から吊してあった。直太は、四つ辻に出て通りを渡り切るのももどかしく、ガラス越しに見える刀を指さして、

「じいちゃん、刀あった、ほらッ、刀、刀、刀……！」興奮に上擦った甲高い声で急きこむように叫んでは、真ン丸く瞠った目で刀と文蔵とを交互に仰ぎ見ながら、「ほらッ、ほらッ、直太が欲しかつ、あン刀……！」

直太に手を引っ張られた文蔵もガラス戸越しに覗き込んで、

「おオ、あれが直太が欲しか欲しかちいいよった刀かア。どら、そんならちょっと見てみにゃいかんねえ――」

古くて建てつけの悪そうなガラス戸だったが、意外に滑ら

かにスルスルと開いた。
「もぉーし、ごめんなさいよ、もぉーし……」
敷居を跨ぎ越しながら声をかけると、暫くの間があってから幾度めかの「もぉーし」に、
「ふぁーい……」
くぐもった応答が薄暗い店内の奥の方から返って来て、店主らしき禿頭の中年男が、店内の黒土を突き固めた三和土の土間にサンダルをペタペタ鳴らして出て来た。店番とはいえ、よっぽど閑だったのだろう。奥の方でうとうとしていたらしい。だが、直太を連れた文蔵をみると寝呆け眼から一転、営業用の笑みを浮かべて、
「何ばお見せしましょか？」
文蔵はさっそく、上から提げてあるおもちゃの刀を何本か、直太のために取り下ろして見せてくれるようにいった。
刀、刀、刀、刀、刀……。
その頃、直太は未だ幼稚園にも通ってはいなかった。だがすこしずつ行動範囲が広がって、家が近所の子らとも遊びはじめ、仲良しも幾人か出来はじめていた。どの子もまだ学齢期前の幼児たちで、幼稚園に通いはじめている者も、直太みたいにまだの子もいた。その中で、直太がいちばん小さくて、ひときわ幼げに見えた。実際、仲間たちについて廻るのがやっとの、「みそっかす」に甘んじている直太だった。
直太を除いた彼ら全員がまるで申し合わせたかのようにそのおもちゃの刀を持っていて、よくチャンバラごっこに興じて遊んだ。つまり、みそっかすの直太だけが唯一未だ刀を持っていなくて、だから仲間たちがチャンバラごっこをはじめると一人だけ仲間外れにされ、見物しているより為方が無かった。そんな直太にとって、自分も刀を手にチャンバラごっこに参戦することが、何を措いてもいちばんの念願、もはや悲願といってもよかった。
そんな直太だから、店主が目の前の台の上に並べてくれた刀を前にすると、もうじっとしてなどいられなかった。小さな躰がひとりでに弾んで弾んで、くりくりした双眸をきらきら輝かせ、ぷっくりと膨らんだ丸い頬には常の倍ほども血の色をのぼらせていた。その照れも衒いも無く正直な反応を示す直太に、文蔵は鷹揚に首肯いてみせ、
「さあ、うちの直太にゃどれが良かろうかねえ……？」
ポリ袋の中身を品定めしていった――。

文蔵の、直太を甘やかすことに最晩年を費やしたかのような、祖父バカの孫煩悩ぶりといったら、死後も語り草になるほどの逸話に事欠かなかった。
たとえば、直太が幼稚園通いを始めたばかりの頃、例の内弁慶から通園を非常に厭がるので母親の節子が理由を問うと、「先生がワガママばいうけん、直太好かぁ～ん！」と答えた。
その「先生のワガママ」とは、アアシマショウネ、ソレガ済ンダラ、オ次ハ、コウシマショウネ、サア、ソノオ次ハ……と、こんなふうにアレやコレやと構われ指図されるのが、

煩くてかなわぬというのだった。誰からも口出し邪魔立て一切されず、ただ満足のいく迄たっぷりと自由を謳歌し、勝手気ままに遊んでいたい。お弁当の時以外は放っておいてほしいのだった。「直太、まだお外で遊んどこォごたっとに（遊んでたいのに）、『はい、もうお集まりぃ～、お部屋に入りなさぁ～い』ちいいなはるもん、厭やん！」

それを聞いて、節子たちは噴き出してしまった。

「あいたッ、こン直太のいう事！……」そういって笑っていると、さらに、

「幼稚ぃと（幼稚な子）が行くけん幼稚園ちゅうとやろ。直太、幼稚くなかもぉ～ん――」野育ちの何かころころと太った幼獣が、チビ助の分際で小生意気な口でも利いたようで、親たちはいっそう大笑いしてしまった。

ただ姉の美奈子だけは手厳しくて、さも軽蔑したようににべも無くいい切った。

「バカばい！　あんたンごつ幼稚かつが他に居ろうかい！　わがままはあんたたい――」

そういう美奈子だってまだその春小学校に上がったばかりだった。だが、学校の図書室で出逢う本はいわゆる童話から、様々な分野に跨がる教育図書、さらには空想科学小説に至る迄、次々と借り出しては読み漁っていた。そして、彼女がおもしろいとおもって読むそれらの本から得られる知識や知恵や教養が、現実世界の森羅万象を理解する鍵となり得ると大らかに信じていた。そんな彼女の眼に直太という弟は、呆れるほどの無知と幼稚と魯鈍を体現している、文字どおりの「愚弟」と映っていた。

それはともかく、誰からも掣肘を受けず心ゆく迄自由に遊んでいたい直太の願望がどれだけ切実だろうとも、そんなわがままが直太のいう「ワガママな先生たち」に通用するはずも無かった。

「だけん、幼稚園やら好かぁ～ん！」

それでもただ、浄土宗のお寺の境内である園庭にある、大きな蘇鉄が植わっている傍の、砂場で遊ぶのは好きだった。

けれども、そこで独り砂遊びに興じているときも、一級上の「ほし組」（年長組）や、同級の「つき組」（年中組）でも三月生まれの直太よりは躰の大きな男児たちに、しょっちゅう邪魔された。とくに中尾繁昭という子供には、まるで目の敵のようにしていじめられた。彼は直太を端から見くびっていて、横合から邪険に押し除けたり、砂遊びの道具を奪い取ったりした。堪りかねて抵抗しようものなら、コイツ生意気ダゾとばかり砂を頭から浴びせかけるなど、質の悪い厭がらせを受けた。そんな娑婆塞ぎとも顔を合わせざるを得ぬ鬼門が幼稚園では、通園が憂鬱で億劫なのも当然だった。

だが、そんな直太一個の事情などお構いなしに、その行列は朝になると必ず直太をお迎えにやって来た。

鍛冶屋町の道幅が狭い通りを、子供たちのカン高い声がまじり合うザワついた喧騒が、南の方角から近づいて来る。突き当りに県立病院の通用門が見える元町の通りから、直太の

家がある鍛冶屋町の通りに出て来る角を曲がって、ぞろぞろ、ぞろぞろ、ぞろぞろ……と、まるで父誠人が話してくれた昔話で俵藤太に退治される百足の化け物のように、たくさんの手足がいちどきに動いて這い擦るように迫って来る。大百足の頭が見えたかとおもうと胴体が後から後から姿を現し、直太めがけて直進して来る――。

直太は、その光景を見ただけで恐慌状態に陥り浮足立って、前の通りに出てお迎えを待つのとは逆に、家の裏手にある畑の方へと駆けだして行く。丸っこい小さな躰が転がるように、広くもない畑めざして逃げ込んで行く。そして桃や柿や無花果の木の根方にしゃがみ込み、息をころし巧く隠れたつもりで潜んでいると、元気ではち切れぬばかりの若い女の先生が、「直ちゃーん、居るとやろオー？」直太の行動はお見通しで、逃げ隠れしても無駄なのだった。忽ち見つかってしまい、せいぜい逃げ廻ったところで、ズボン姿で足廻りが軽快な先生にはすぐに捕まってしまう。

けれども、捕まってもすぐには降参しない。チビっ子の幼獣にも野性的本能は備わっていて、力の続く限りは抵抗を止めない。ぎゃあぎゃあ泣きわめいて、顔を涙と洟水まみれにしながら精一杯暴れ狂って抗うのだ。ただ、

――厭なものは厭だ！

それに尽きる。己を無理やり従わせようとする相手には、ありったけの力で抗い、剛情を張り通すのみ。弱虫で泣き虫のくせに、剛情ッ張りなのは誰に似たものやら――。だが、相手は女性でも小っちゃな直太に勝ち目は無い。結局、最後は抵抗むなしく躰ごとずるずると引き擦られて行くのみ……。

入園して暫くはそんな攻防戦が、登園の時間が来るたびに毎朝繰り返された。

文蔵は、直太が厭がって泣き叫ぶ様子に堪え得ず、見るに見かねてとうとう、

「しぇんしぇい、今朝もまーた、わだぐじ（わたくし）の孫の直太がバタ狂うて行くとば厭がりょります。そげーん厭がりょりますとば、酷かァ！　そげん無理してまで、何が何でん引っぱっていき召さんでん、よかろごつあるが（よさそうなものだが）……」

孫可愛さに発する抗議だった。

「置いて行き召して良かばんも、あなっつぁん（あなたさん）、どうぞ置いて行き召せ！　幼稚園に行かんけんちゅうて、死にゃせんでしょうが。そげん無理やり為ょっと、かえって厭がっとの癖になっでしょうもん。うちの直太ば、どうぞ置いて行ってはいよ（「はいよ」は拝領が語源とされ、～してくださいませの意）！」

そればかりか、嫁の節子にも、

「節子しゃんも、こげーんまでして直太ば幼稚園にてろんやらんでん良かろごたるが。酷かァ！　むぞうしのさんばん（可哀そうでいけないよ）、ハア～、直太がかわいそか！」

そして直太には、

「良か良か、直太、今日はじいちゃんと家で遊んどくか――」

そういってなまじっか甘やかすものだから、直太もよけいに後ろ髪引かれると見えて、
「うん、じいちゃーん、直太、じいちゃんと遊んどくよオ〜、じいちゃーん、じいちゃーん、じいちゃア〜ん……！」
いっそう諦め悪く泣きわめき、半狂乱の抵抗を続ける。それでも先生は幼稚園からのお迎えという職務を忠実に遂行すべく、直太が抵抗するほどに強引さを増し力ずくでも連れて行こうとする。そのため直太は、いっそう激しく泣きながら暴れ狂って、ずるずると引き擦られながら登園して行くという為体。
「直太の幼稚園嫌いがこのままずっと続くごたんなら、困ったもんばい——」
ところが、そんな親たちの悩みも、意外に早く解決への道筋を辿った。心やさしい女児の友達が出来ると、直太の幼稚園嫌いも次第に解消されていったのだった。
その子は神崎智佐子といって、幼稚園の傍に住む、これはこれでまた愛くるしい童女だった。ただ、おなじ愛くるしいでも、男児たる直太とはまたずいぶんと違って、見るからに可憐な感じで表情が豊か、頭の回転が速くて利発でよく気がつく、おしゃまさんだった。しかも、賢いばかりか気立て好く親切心に富んでいて、頑是ない直太がぼんやりしていると放ってはおけずに手を差し伸べたくなるようだった。
そんな智佐子を中心にもう幾人か、なにかと直太に構いつけては世話を焼く女児たちが現れた。彼女らの好意に励まされ、直太の幼稚園嫌いも徐々に薄らいでいった。と同時に、先生たちの言いつけに従うことへの抵抗感も薄らいで、浄土宗の古いお寺である園独特の雰囲気にも慣れていった。
直太は、やっぱり智佐子のことがいちばん好きだった。
その日も、直太はしくしく泣いていた。砂場で遊んでいた直太をとくに邪険かつ執拗に追い立てたのは、またあの中尾繁昭という子供だった。繁昭の家は鰻や鯉などを扱う川魚問屋で、彼はそこの一人息子だった。
その内海に面した水郷地帯には、土地柄ゆえ鰻のような川魚の養殖業者が少なくなかった。中尾商店も養鰻場から仕入れた鰻を市内の鰻めし屋に卸すのを主な業務としていた。鰻めしは「鰻のせいろ蒸し」のことで、鰻の蒲焼きをそのタレのかかった飯の上にのせ一緒に蒸した、この土地独特の名物料理だ。中尾商店は市内で一二を争う川魚問屋で、広い店内の大きな生け簀には常に多くの鰻や鯉を泳がせ、魚の肥育と健康管理や配送などに従事する従業員も雇って繁盛していた。
こうして先代迄は家業専一に精励してきたが、その先代がまだ働き盛りの年齢で急死すると、跡を継いだ繁昭の父親は待っていたわけでもなかろうが、市議会議員選挙に保守系与党から立候補した。新人で初当選以来、議員職と家業の二足のわらじ。とはいえ彼の念頭には別段、赤心に根ざす郷土愛、地元のために粉骨砕身する覚悟などあるわけでもなく、ましてや理想とする社会モデルの構想など薬にしたくも無かった。ただ事あるごとに「男と生まれたからにゃ……」などと大風

呂敷を広げ、国士気取りで天下国家を論じてはみる。だが何の事は無い、己より多少は粒の大きそうな相手には阿って、抜け目なくオコボレに与ろうとする。そうした質の権威主義・事大主義を信奉し、親方日の丸、長い物には巻かれろを地で行く人物といえば、まずまちがいない。志操といえば権力志向に凝り固まっただけのことで、彼を知る人なら大抵その本質を見抜いていた。

「結局、あン人ぁ己可愛さだけの私利私欲、我が偉うなりたかだけじゃん――」

それでも人々のいろんな思惑が作用して票は集まり、田舎政治屋としては中堅どころにつけているのだった。

そんな父親からの影響か繁昭も、年長の「ほし組」でやんちゃな気の荒い連中、同じ年中の「つき組」でも自分より大きくて強そうな面々には、妙にべちゃべちゃ媚びを売る代わりに、自分より弱小な相手には横暴にふるまった。直太なんか弱虫の泣き虫だと完全に見くびっていて、撲いて追い立てたばかりか、砂場の砂を掴んで投げつけた。それも執拗に、何度も。幸い目には入らなかったが、髪の毛のあいだや襟の内側に入った砂がザラついて気色が悪かった。直太はなぜ彼からそんな為打ちを受けねばならぬのか理解できなかった。

直太は、理不尽な暴力に抗う術も無く、ただ自己防衛のため戦いを避けて逃げ出したのだった。弱虫な自分が惨めで情けなくて悔しくて、本堂の階の脇の蘇鉄の下でひとり涙を流して泣いていると、おなじ「つき組」の智佐子が寄って来て、

「泣かんでん良かとよ、あんた何も悪うなかとやけん。ほら、これで拭かんね――」

一部始終をみていたらしく、いかにも女の子らしい柄物のハンカチを差し出してくれた。直太が、すぐとは手が出ずスモックの袖で掻い拭っていたら、智佐子自らその香しい匂いのするハンカチで、そっと撫でるように、傷の手当でもするように――彼女の母親は県立病院で看護婦さんをしていた――拭いてくれた。これじゃいかにも直太が女々しくて意気地無しの駄目男みたいだが、智佐子にやさしくしてもらったのがきっかけで、通園が以前ほどには苦にはならなくなった。

だがそれ迄は、直太にとって幼稚園はもちろんそれが在る方角すら鬼門で、そこからのお迎えがやって来る平日の朝には、祖父と孫が断腸の想いで暫しの別れを惜しむ愁嘆場が、毎日のように繰り返されたのだった。そして、その際の文蔵の言動が彼の死後も語り草となって話題にのぼった。いわく、

「じいちゃんな直太にゃ甘すぎるくらい甘うて、『直太、今日は幼稚園には行かんで、じいちゃんと家で遊んどくか』てろん何てろん、いいよんなはったもんねぇ」

「うん。あれじゃ直太も後ろ髪引かれてから、いよいよ行きとうなか一方やったろたい」

「傍から見とって可笑しゅうなるくらい、もう直太直太じゃったけんねぇ――」

その手の逸話には事欠かず、可笑し味を帯びて語られ、文蔵亡き後は彼を偲ぶよすがとなっていた。

文蔵は、テレビ番組の中では大相撲中継と時代劇をとくに好んで観た。年六回の本場所期間中は、大相撲中継をやる時間が来ると白黒テレビの前に陣取って、

「おい、直太、じいちゃんとお相撲ば見るぞ、ほら、お相撲お相撲……」直太を相撲観戦に誘うのだった。

文蔵自身は若い頃柔道の稽古に打ち込んだ口だったが、相撲にもちょっとうるさい、いっぱしの好角家でもあった。未だ相撲の何たるかも知らぬ幼い直太相手に、力士たちが繰り出す技の良し悪しや相撲っぷりについて、文蔵自身の好みも交えて講釈した。

「相撲ちゃあ（相撲というものは）ちゃーんと見よるとおもしろかろが、なあ直太」そういったばかりでは足りず、「直太も、相撲取りさんが為っごつ、ほら、こげんしてみん。ほら、じいちゃんがいうごつ、こげんしてごらんちいいよろうが……」手とり足とり実技指導にも抜かりが無かった。「ハイ、腰はグッと下げて、顎ばグイと引いて、低くしゃがんで構えなさいよ。相手ばよーと（よく）見て立ち上がったらドーンッち突っ込んでって、懐に跳び込んで褌ば掴んだら……」

しかし生憎な事に、直太の興味は相撲には向かわず、いっしょに観ようと誘われても、

「うんにゃ、よか――」素っ気なく断ったり、熱心な実技指導の途中で飽きて機嫌を悪くしたりした。

そんな直太が相撲に覚醒める迄にはあと三年、そう、あと三年待たねばならなかった。小学二年生の体育の授業で相撲のおもしろさに覚醒めると、教室の前の廊下の板張りの上ですらドッタンバッタン。軽度の打ち身や擦り傷なんて慣れっこで、「唾どん付けとけ！」で済ますのが流儀となった。

だが、文蔵の存命中にはまだ相撲よりもチャンバラ、殺陣を見せ場とする時代劇のほうをずっと好んで観た。

一九七〇年前後、昭和四十年代半ば頃迄はまだチャンバラ映画が盛況だった影響もあってか、テレビドラマでもチャンバラ時代劇が人気を博していた。その波及効果は片田舎で育つ子供たちの遊びにも及んで、鍛冶屋町界隈に住むチビっ子たちの仲間裡でも、直太よりすこし早く生まれ、躰もいくらか大きな男児たちは皆大抵、チャンバラごっこに打ち興じるようになっていた。直太も活動範囲が広がるにつれ、近所の子供らと遊ぶ機会が増えていったが、彼らが合成樹脂で出来た刀を手に手にチャンバラごっこに興じ始めると、丸腰の直太だけ指をくわえて眺めている他なかった。見物しているだけでは飽き足らず、自分も参戦したい欲求の抑え難さに、

「直太もかっちぇて（仲間に入れて）！　ねえ、直太もかたろうごたる（参加したい）。ねえねえ、かっちぇてよオ！」

すると、直太の家の斜向いにある真宗のお寺の跡取り息子で、小宮山浄海という男児から、

「ばってんがら、直ちゃん刀ば持っとらんめえもん？」

「……うん、持っとらんよ」しぶしぶ答える直太。

すると、お寺の子だからかふだんはお行儀が良くて物言い

も丁寧な浄海が、チャンバラごっこの最中とあっては気が逸り荒ぶっているものだから、
「持っとらん奴ぁ、かっちぇてやられんたい！」刀あってのチャンバラごっこなんだぞ、肝腎要の刀も持たぬ奴は黙って引っ込んでろとばかり、どんッ、と直太を押しやった。
それを見ていた他の連中までがいっしょになって、
「刀ば持っとらん奴ぁ、かっちぇてやられぇ～ん！」
「かたりたかなら、刀ば買うて貰うて来ぉ～い！」
「邪魔やけん、あっち行けェ～！」
口々に直太を排斥し、ご念の入った事には意地悪くアッカンベーまでして見せる子もいた。こうした場合の子供らというのは残酷で、彼らを無邪気で純真無垢な存在と美化し理想視したがる性善説的人間観に冷や水を浴びせる。
直太は、チャンバラごっこの舞台となっているお稲荷さんから自宅迄の家並みでいうと三軒分、距離にして三十メートル足らずを、わんわん声放って泣いて帰った。
以後、もう彼らなんかとは遊ぶのに懲りて絶交を決意したかといえばその逆で、ますますチャンバラごっこに恋い焦がれ、憧れをつのらせた。そうなるともう、彼らが手に手に勇ましく振るう合成樹脂製のちゃちな刀が、やすっぽいどころかカッコ良くてカッコ良くて、欲しくて欲しくて、一日も早く自分も刀を手に入れ参戦したくて堪らなくなった。そこで例によって、祖父文蔵に得意のおねだり攻勢をかけた。
その頃の文蔵は、食後などに胸やけを訴える頻度が増え、何だか面やつれがして頬骨が目立ち、骨太な躰がいっそう骨張ってきてはいたが、直太には特段に甘い孫煩悩ぶりは健在だった。遊び仲間たちのとおなじおもちゃの刀を、それも大奮発して脇差や十手とセットの豪華版を買ってくれた。直太の喜ぶまいことか！　欣喜雀躍、ほとんど狂喜した。
こうなればもう後はもちろん、連日のチャンバラごっこ――。
仲間たちと剣士になり切り白兵戦を演じて遊ぶ、頭の中はその事ばかり。あとはもう一切が空無に等しかった。いかにもチャンバラ時代劇に出て来そうな、時には剣豪の、また時には秘術を駆使し超人的に活躍する忍者の、その時々の役になりきって刀を振り廻し死闘を演じた。寝ても覚めても、昼夜分かたずが、けっして誇張ではなかった。夢の中までチャンバラごっこらしく、殺気立ったような寝言と、激しいアクションが加わった寝相の悪さが、それを物語っていた。

直太は、チャンバラ小僧たちの一味となって剣豪とその太刀廻りを演じているうち、その体験から誇大妄想的な自信を得たようだった。
その日も砂場で遊んでいると、年長の「ほし組」で名前がマサルだからマサちゃんと呼ばれている男児が、巨大怪獣がノシ歩く様を真似しながら近づいて来た。彼は躰こそ直太よりずっと大きかったが、顔つきといい躰つきといい何だかしまりが無くて、見るからにちょっとウスノロっぽかった。そ

の代わり挙動の端々から粗暴さが窺われる乱暴者で、己の図体と膂力を誇示して喜ぶ癖があり、そのため周囲の子らから敬遠されがちだった。だがそれを意に介する様子も無く、ただただ無遠慮にふるまって独特の存在感を醸し出していた。

直太は盛り上げた砂山の両側から手でトンネルの横穴を掘り進めていた。もうすこしで開通するところへ、マサちゃんが、「ずしーん、どしーん、ずしーん、どしーん……」と特撮映画の巨大怪獣を真似て歩み寄って来て、ひときわ高く足を上げたかとおもうとまるでほんとうの怪獣気分で、直太の砂山を踏み潰した。おかげで、横穴に手を突っ込んでは砂を掻き出していた直太は、その手ごと危うく踏み潰されるところだった。

それ迄の直太だったら、とても敵わないとその場を逃れ、後は悔し泣きの泣き寝入りに終わったにちがいない。

ところが、その時は躰が別の、いつもとは逆の反応を示した。しゃがんでいた体勢から立ち上がりざま、勝ち誇って決めポーズなんかつくっている敵の無防備な腹部めがけ、握り固めた拳を撲き込んでいた。目前に迫る敵に対しわずかに躰を捻って反動をつけ、思いっ切り、

――しゅッ……。

回転の加わったフック気味の一撃を繰り出すと同時に、「えいやーッ！」チャンバラごっこの時に発する気合声まで、腹の底から搾り出していた。すると狙い澄ましたかのように、まるで吸い込まれるように、小さな拳が敵のみぞおちに命中したではないか。体格でも膂力でも圧倒的にまさる相手は、直太からの当て身をもろにくらった刹那、

「ぐふぅーッ……！」

いかにも痛そうにひと声呻くと顔をくしゃくしゃに顰め、それっきりその場にしゃがみ込み、打たれた腹を押さえてうずくまってしまった。海老のように躰を折り曲げ、うぐうぐ低く唸った後からしゃくり上げて泣きだした。泣きじゃくる間に間に、「痛かァ……、痛かァ……！」と弱々しい声をもらした。ドテッ腹に直太からの一撃をくらった衝撃と堪え難い苦痛とに、もはや為返しどころではなかった。

直太は、その一撃をくらわせた直後の残心の姿勢で、マサルが立ち上がれずに泣きだす様子を見届けた。だがその後は、所在無げに立ち竦んでいた。為てやったりと溜飲が下がるより先に、ふだんの迫害者がいつもの威勢もどこへやら、ワアワアいって嗚咽する様を呆気にとられて見ていた。

暫し呆然――。

それはその場に居合わせた他の子らもいっしょだった。が、いったい何が起こったのか、状況がはっきりするにつれ、辺りは俄かに騒然としはじめた。なにしろ弱虫で泣き虫の直太が、そんな彼を嵩にかかって迫害しようとした札付きの乱暴者を、一撃を以て撃退したのだ。不意の椿事に、彼らは驚愕と同時に好奇心を刺激されるまま寄り集まって来て、直太とマサルの周囲には忽ち小さな人垣が出来た。

そのうち、急におもい出したかのように傍観者たちの中か

ら誰かが、こうした場合の慣例で、
「泣ぁーかしたア、泣ぁーかしたア、マサちゃんがぁ泣ぁーかしたア、直太ば泣ぁかした……」素ッ頓狂な声で囃し立てはじめた。
だが、すぐに別のが割り込むようにして、
「うんにゃばい（ちがうよ）！　――直太がぁ泣ぁーかしたア、マサちゃんば泣ぁーかしたア……」訂正して囃し立てた。
「いうとかやん（いってやろ）、いうとかやん、先生にいうとかやん……！」
訂正を挿し挟んだのは、川魚問屋・中尾商店の一人息子繁昭。彼はまだ四歳にして、誰に似たものやら自分より強者には媚びを売る一方、直太のような弱者には嗜虐的ふるまいに及ぶのを常としていた。それも多くの場合、大人たちの眼を盗んで。そんな繁昭が、まるで自分の為事とばかり、
「ちゃあ、ちゃあちゃあ、ちゃあちゃあちゃあァ～、泣ぁーかしたア、泣ぁーかしたア、直太がぁ泣ぁーかしたア、マサちゃんばぁ泣ぁーかしたア、いうとかやん、いうとかやん、先生にいうとかやん……！」すっかり調子づいて囃し立てるのだから、いったいどの口が囃し立てるのか。
そこへベテランの女の先生が駆けつけて来て、マサル本人が「痛かァ、痛かァ」と訴えるように泣いているので、
「あらッ、マサちゃんなどげんしたね？　うん、どこが痛かとね？」尋ねながら介抱に当たった。
すると繁昭が、いよいよ鬼の首でも獲ったように、
「直太がマサちゃんば泣かしたとばい、悪かつぁ直太やけんね！　ねえ、先生、悪かつぁ……」己が悪癖は棚に上げて、マアうるさいこと！
先生は軽く受け流しておいて、直太に対して向き直り、目の高さを同じゅうすべく跪く姿勢で、
「直ちゃん、お腹は人の躰の中でも大事なかところやけんね、撲いたりしたら駄目とよ」噛んでふくめるように注意した。
直太は、
――お腹は弱点やけん、太か強か奴でん一発撲いたら泣いたとばいね。
覚るところあって、こっくりと首肯いた。
そんな直太の後ろから、神崎智佐子のチサちゃんが、
「ばってんマサちゃんが意地悪して、直ちゃんの作りょんなったトンネルば踏みつぶしなったもん」無残に潰された砂山を指さしながら、直太を弁護してくれた。
おかげで先生は、天辺が噴火口のように陥没し、そこにマサルの靴の足形がくっきりとついた砂山をよく観察できた。事情を理解した彼女は、マサルのような子供にいって聞かせるには良い機会だとおもったらしく、泣きじゃくっている彼の二の腕を掴んで、
「最初に手出ししたなら、マサちゃんが悪かとやね」と審判をくだしてから、「なんで直ちゃんが遊びょっとば、わざわざ邪魔せないかんかね？　えぇッ、マサちゃんな何でそげな事ばしたろうかね？……」マサルを問い詰めにかかった。

マサルはまだしゃくり上げて泣くばかりで、先生の詰問に対し受け答えらしい言葉はなにも発し得なかった。そんなマサルに追い討ちをかけるように、先生は、
「わざわざ他人に厭がらせするごたる人間は、ロクな奴っじゃなかとよ！　そげなつぁ、根性の腐った、悪か人間の為っ事っちゃけんね。だけんマサちゃん、直ちゃんにでん誰にでん厭がらせやらしちゃ出来んとよ。わかったね？」
だからもう絶対しないようにといって聞かせた。
マサルは、憐憫を求めてよけいだらしない感じの嗚咽をもらしつづけ、当分泣き止みそうもなかったが、とにかく今だけは身に沁みて懲りたようだった。
先生はまた直太にこう釘を刺しておくことも忘れなかった。
「ばってんがらくさい、直ちゃんも他人のお腹ば撲いたらァ、出来ん――」
喧嘩両成敗でもなかろうが、これでいちおうの決着をみたところで、人垣をつくった園児たちの中からまたぞろ、誰からともなく例の調子で囃し立てはじめた。
「泣ぁ～かしたア、泣ぁ～かしたア、直ちゃんがぁ泣ア～かしたア、マサちゃんばぁ泣ぁかしたア、ちゃあ、ちゃあちゃあ、ちゃあちゃあちゃあ……！」
すると他の園児らも唱和して口々に囃し立てはじめた。
「泣ぁ～かしたア、泣ぁ～かしたア、直ちゃんがぁ泣ぁ～かしたア、マサちゃんばぁ泣ぁ～かしたア～……！」
園児たちの素ッ頓狂な声が幾重にも折り重なって入り混じった大合唱が、直太を包み込んだ。手拍子こそ入らなかったが、その合唱は直太の暴力的なふるまいを咎めるよりはむしろ、まるで彼の勝利を言祝ぐ凱歌のように響いていた――。

【三】

直太はその小さな躰に渾身の気迫を漲らせ、互いに好敵手を演じる仲間たちと激しく斬りむすんだ。いっぱしの剣士どころか達人になったつもりだから、裂帛の気合も勇ましく、
「えいッ！　……やぁーッ！　……たぁーッ！」
そんな剣戟場面で口にする台詞でもチャンバラ時代劇の影響は大きく、「わしの必殺剣をば受けてみよ！　……なんのこれしき、そっちこそおもい知ったか！　……ふんッ、口先だけ達者な小童めッ！」そうして、ぶつけ合った刀がからみ合うや、両雄相譲らず鎬を削る鐔迫り合いへともつれ込んでゆくのだ。ごっこ遊びとはいいながら、生きるか死ぬかの真剣勝負を全力で演じ切るところにこそ、チャンバラごっこの神髄が、醍醐味が存するようだった。
それ迄の直太はといえば、いずれも四五歳ばかりの幼児が揃った仲間裡にあってなお、ひときわ乳くさく、常にみそっかすに甘んじてきた。いつもおっとりと構えて、およそすばしっこさとも無縁なら、他人に打ち勝とう、相手を打ち負かしてやろうという意欲や気迫や闘争心を、母親の胎内にでも置き忘れて生まれて来たかに見えた。だから、幼稚園でも他の園児からしょっちゅう押し除けられたり、いじめっ子から

泣かされたりして帰って来ては、周囲の大人たちをもどかしがらせた。
「やられたら為返しに打ッ撲いてやっと良かったたい！　あア歯痒か！」
「美奈子ンほうが負けず嫌いやけんがら、入れ替わっとっと良かったろたい！」
「直太、男ン児ならしゃんとせんば。伊達にきんたま付けとっとやなかろうもん――」
腹の虫がおさまらぬ様子でいうけれども、直太だってなにも好きこのんで、自らが望んで男児と生まれたわけではなし。その鬱憤のやり場というか捌け口の無さに、いじいじしてまたぞろ泣くことしか知らなかった。
そんな直太が、チャンバラごっこに熱中しているときばかりは、まるで闘志を剝き出しにして立ち向かって行くのだった。敵役の子供は直太を、今迄どおりの乳くさいみそっかすと甘くみて油断していると存外、その強烈な打ち込みに辟易させられるのだった。内弁慶で人見知り、引っ込み思案の弱虫で泣き虫だった彼が影を潜め、
「ぶぁいたぁーッ、えすかろごたる（怖いようだ）！　だって、直ちゃん本気やもん……」
勢いにまかせて攻撃的にバシバシ打ち込んでは、大胆不敵にグイグイ押して来る直太に仲間たちも触発され、
――ほんなこて真剣勝負ば為ょるごたッ！
いっそう身を入れて白兵戦を演じ切るべく打ち興じるのだった。その意味で、直太が文蔵から買って貰った刀を引っ提げチャンバラごっこに身を投じたことの影響は、周囲の子らにとってもけっして小さくはなかった。マンネリズムに支配されかけていたところに、直太の参戦がカンフル剤とも電気ショックともなって、彼らのやる気を揺り起こし甦らせたのだ。すると、たかがごっこ遊びを真剣に演じ切るという、遊戯なのに演武的な、さらにいえば闘争的な活動へと変貌していったのだった――。

ところが、ここに予期せぬ大問題が出来した。肝腎要の刀がとんだ「もちの悪さ」をさらけ出しはじめたのだった。
まだ小さくて非力な子供たちでも、刀と刀とを互いに力いっぱい打ち合わす度に生じる衝撃と来たら、けっして馬鹿にできない。バシッ、と単発ではたかが知れていても、斬り合いを演じる過程で、バシッ、バシッ、バシッ、バシッ、バシッ……。幾度となく打ち合わすうちに合成樹脂素材の刀身が、決まって鐔元の部分から次第にへたってくる。ハリもコシも失い、じきに弱ってくると、かるく横に振っただけで鐔元から先の部分が、
――ふにゃッ……。
右へ左へと揺さぶる度に、
――ふにゃ、ふにゃ、ふにゃッ……。
拍子抜けするほど、いともかんたんに折れ曲がるようになってしまうのだった。

「うわいたあーッ、こらいかん！　刀の、武士の魂の、こげんふにゃふにゃになってしもた……！」
一度そうなると後はもう癖になって、ふにゃふにゃふにゃア～となり増さる一方で、もう元には戻らない。
――ばってん、闘うて勝負ば為ょっちゃけん、為様ン無かろもん！
決闘中の剣士が手剛い宿敵を前に、「刀がふにゃふにゃすっけん、ちょっと待った――」などと、そんな甘っちょろい悠長な事は武士の意地に懸け口が裂けてもいえないのだった。だから正常な状態を装って闘い続けるのだが、バシッ、バシッ、バシッ……と打ち合わす度ごとの衝撃が、すでに弱った鐔元の部分にだけ集中して来るような按配で、やがてハリもコシも抜け切ってしまい、そうなるとそこから先の部分の重さすら満足に支えきれなくなって、ついには、
――ぶらぁ～んぶらん……。
刀がこのざまでは、彼らの士気までが、
――ふにゃふにゃふにゃア～の、ぶらぁ～んぶらん……。
萎えるわ、殺がれるわで、
「こげんなっともう、チャンバラどこっじゃなかばい（チャンバラどころではないよ）！」
だが、その合成樹脂という素材が弾力性と柔軟性には富んでいて、いい加減ふにゃふにゃになっても、サアそこからが存外しぶといのだった。今にもちぎれそうで容易にはちぎれない。しかし、こうなるともう痩せ我慢も限界だ。
「うわいーッ、こげーんふにゃふにゃになった！　ほら、ふにゃふにゃア～ち、あら、ぶらぁ～んぶらんち、ふんッ、阿呆ンごて（阿呆みたい）！……」
刀がふにゃふにゃなら、躰もふにゃふにゃ。双方いっしょにくねらせて可笑しげな踊りを披露し、そうして暫くはみんなしてゲラゲラ笑いこけたりしている。が、じき飽きてくるとやがて癇癪を起こし、破壊の衝動が頭を抬げてきて、
「エエくそッ、せからっさ！　こげなつぁもうつまらん――」
切っ先のほうを足で踏みつけて引っ張ったり捻ったり、自ら引きちぎってしまおうと顔を真っ赤にして息んでみるが、独力では埒が明かない。そこで、仲間たちが加勢して、綱引きのように両側からウンショ、ウンショ……と掛け声かけて、ぎゅーうッと引っ張り合ったり、ぐにゅぐにゅーうッと捻ったりした末、鐔元のところから、
――ぶちんッ！
ようやくの事に捻じ切って、「はあーッ、ざまあみろ！」と刹那的な爽快感も束の間、徒労の後の虚無感に浸される始末――。
つまり、直太の参戦でチャンバラごっこが盛況を極める一方で、その遊びに必要不可欠なおもちゃの刀が、
――もちの悪さ。
その致命的欠陥を露呈して以来、それは直太たちチャンバラ小僧全員の悩みの種となった。
だがそれならといって、ただ単純に刀の強度や耐久性がす

ぐれてさえいれば良いのか？　否、事はそう単純ではない。

たとえば、こんな小さな事件も出来していた。

直太が福岡にある母節子の実家に行ったとき祖父母から、実物よりはだいぶ小型だが十手を貰った。どこかへ旅行した際の土産物だったろうが、地金が鉄か真鍮のような硬い金属で出来ていて、ズシッと来る重厚な手ごたえの頼もしさに忽ち気に入った。ところが、些細な事からきょうだいゲンカして、そうなると憎くて堪らぬ姉美奈子の頭を、その十手でぐわんと音がするくらい打ッ撲いてやった。姉は火が点いたように泣きながら大人たちの居る方へと逃げて行き、直太から十手で打たれたといいつけた。髪の毛の上からそっと撫でただけでもわかる程度のタンコブが出来ていて、とくに慌てたのは祖母だった。未だ手加減することを知らぬ頑是ない直太に、使い方次第では凶器ともなり得る品物を与えた迂闊さを悔いた彼女は、

「もうやらん、ばあちゃんに返せ！」

当然放したがらない直太から強引にもぎ取ると、直太の目も手も届かぬ所へ隠し込んでしまい、もうそれ以来、直太の手に戻って来ることは無かった――。

その点、このおもちゃの刀でなら撲かれてもタンコブが出来ることなど無かった。鐔を除けば柄頭から切っ先まで、弾力性のある合成樹脂の一体構造で、内部は空っぽの張りぼて状。製造工程を想像するに、どろどろに溶かした軟質の合成樹脂素材を金型に流し込んで薄皮状に延ばし、冷えて固まってきたところを型から剝がし、半身の状態どうしを貼り合わせて仕上げる――。中が空洞状の、あんこ抜きで皮ばかりの鯛焼きか回転焼きでも想わせる構造なら、軽いし弾力性と柔軟性に富んでいて、躰に当たっても子供たちが本気で痛がったり痛々しい傷が残ったりすることも防げる。それで安全性が確保できるなら、代わりに強度と耐久性を犠牲にしてもしょうがないと判断されたのだろう。

もちろん他にも原材料費の節約など諸々の細々とした理由はあるのだろうが、とにかく直太と仲間たちはチャンバラごっこに使う刀の脆弱さ、耐久性不足に悩まされた。

だが直太たちだって、ただ無為無策のまま手を拱いていたわけではない。そろそろ刀がふにゃついてきそうな厭な予感がしてくると、あたかも運動選手が傷めた故障部位にテーピングを施すように、弱点となる鐔元部分をセロファンテープやビニールテープでグルグル巻きして固めてしまうなど、予防的補強策も試みられた。実際、それである程度までなら刀の寿命を延ばせるのだった。

だが、やはりその効果も高が知れていた。どうせまた早晩そこから徐々に弱ってきてしまう。したがって、抜本的な解決策には到底なり得ないのだった。

「じいちゃん……」

直太が甚だ意気上がらぬ調子で呼びかけると、文蔵も、どことなく物憂げな様子で、

「なんね、また刀ばどげんかしたつか？」
直太がチャンバラごっこに凝りに凝っていた頃、文蔵の躰には、単に加齢のせいばかりともいい切れぬ、もっと急激な衰弱の兆候が現れはじめていた。家族からは一度医者に診てもらうよう口を酸っぱくして勧められていたが、若い時分からずっと医者嫌いで通してきた文蔵は、素直に応じるそぶりも見せなかった。しかし、そんな頑なな文蔵でも己が躰に兆した変調は自覚していて、どことなく翳のある表情でいることが多くなった。
そんな文蔵に対し直太は、いつになく屈託ありげに刀を持ち扱いながら、「うーん……」と鐔元のおなじ箇所ばかり気にしているのだった。
「どら、ちょっと持って来てみん。ほら、貸してみん……」
文蔵に手渡された刀は、縦に振ってみても別条無かったが、ちょっと横に振ると、ほとんど空気抵抗だけでも、ふにゃふにゃふにゃ～、の、ぷらぁ～んぷらん……。
「あちゃッ、なんか、こげんぷらぁ～んぷらんするごつなっちもて！」
そして、ためつすがめつするうちに、
「あらァこら、ここンとこの、すこし裂けとるじゃないか」
鍔元に出来た小さな裂け目に気づいた。なるほどこんなふうに穴が開いてしまっては、さすがにもうチャンバラごっこどころではなかろう。「こら出来んねえェ――」
暫くはその辺りを医者が触診でもするように扱ってみていたが、「はぁーッ、じいちゃんな魂消った……、はぁーッ、ぐらりしたぞ（がっかりした）、直太。ついこないだ買うてやったつば、もう壊したげなァ……！」憂鬱そうに嘆息した。
だが直太には、まるで自分が故意に壊したかのようにいわれるのは心外の至りだった。それも、大好きな文蔵から疑われたのでは立つ瀬が無い。
「じいちゃーん、直太壊しとらんとばい。直太、ただ遊びょったと、ふつうに遊んどっただけやもん。そしたら、刀がそげん勝手に壊れたとばァ～い！」
いわば不可抗力の作用した結果であって、ゆえに我が身は潔白なのだと主張して譲らぬ、直太。直太がそんなふうに涙ながらの哀訴、また泣訴に及べば、文蔵は、責めるに忍びず、
「ふーん、そら為様ン無かねえ――」
「うん、ねえ、為様ン無かろう、じいちゃん」そういって直太は文蔵と正面から向き合い、目と目を合わせて、「そしけん……これと同じとば、また買うてぇ、ねえ、刀ば！　今度ぁもっと大事にするけん！　もう十手てろん小さか刀てろんな要らん、ただこげな刀だけで良か。ねえ……！」
例によってのおねだり攻勢。
こうなると、直太にはたいそう甘い文蔵じいちゃんのこと、虎の子の恩給から捻出した自分の小遣いを割いてでも、次の刀を買ってやる。すると直太は、その小っこく丸っこい躰をぷにぷにさせ踊るようにして、欣喜雀躍。そのいかにもうれしげな姿に、文蔵は忽ち相好崩してヤニ下がっていた――。

だがその前後から、あとどれくらい直太をそうやって甘やかしていられるのかも、覚束なくなっていった。ひどい倦怠感にも頻繁に襲われるようになった。一度その発作的症状が現れると、躰の芯を支える突っ支い棒が抜かれたようで、その場に打ち伏してしまいたくなるほどの気だるさ、倦怠感や虚脱感を覚えた。暫く我慢していると何とか遣り過ごせたが、薄気味の悪い汗が額や腋を冷たく濡らした。食後にはひどい胸やけに悩まされた。ずっと健啖家で通してきた彼は、ただもう消化器系の臓腑がいい加減くたびれたんだと、原因を単純な加齢に求めようとした。一つ一つの症状を結びつけて深刻に考えることは避けていた。そして己が身の裡に起こりつつある変調が、どうもただの老衰に起因するそれとは違うようだとも、薄々感じ取っていた――。

日々の新聞に必ず目を通す習慣を持つ文蔵が、玄関横の陽当たりの良い広縁に置かれた彼の机でその日の朝刊を読んでいると、家の表の方から直太が、なにやらブツブツ独語ちながら入って来るのだった。ガラガラガラッと玄関のガラス戸を開け、三和土にズック靴を脱ぎ捨てて上がって来て、文蔵の居る机の脇に立つと、開口一番、

「じいちゃーん、また壊れたア～！」

文蔵がそちらへと向き直っても、わざと新聞紙を衝立のように直太の前に広げて黙っていると、仔猿のように文蔵の膝に這いのぼって来て、新聞紙の下から頭を潜らせると、丸い顔をにゅっと文蔵の面前に突き出した。

「ねえ、じいちゃーん、刀がまた壊れたア～！」

「こら、破れる」文蔵は聞こえなかったフリをする。と、直太はわざと眉間に皺を寄せた顔を近づけて来て、

「あのねぇ、じいちゃん、直太が今いうたの聞こえんやったとオ？　刀がねえ、また壊れたとよオ！」

文蔵は、直太から体温といっしょに漂って来る、汗と埃っぽさと唾気の入りまじったような健やかな子供の発散する独特の匂いを、肺腑一杯に吸い込んだ。文蔵はその芳香とは到底いい難い匂いが、嫌いではない、というより好きだ。その匂いが愛くるしい直太を余計に愛おしくする。だが、わざと素っ気なく、

「ふうーん、そりゃ残念無念やったねぇ」そういって、ムスッとした直太の顔をまじまじと見据えてから、「ばってんそげん、『じいちゃん、刀がまた壊れたア～』ちゅうても、まだこン前買うてやったばっかしじゃろが。そりゃ、もう壊したちね？　かアーッ、じいちゃんな、ほんにウッ魂消ってから、ぐら～り（がっかり）しとっとぞ、直太。わかるか？」

祖父バカの孫煩悩もさすがにうんざりして、

「まぁちぃった（もうすこしは）オマエ、巧い具合に力ば加減して遊ばやこてぇ（遊ばなくちゃ）ち、いっつもそげんいいよろうが。程良う手加減して遊ばんけん、大事にすっと長もちする物でん、すーぐ壊るっとたい。そうじゃろもん、なア直太？」文蔵は孫を愛おしみながら、諄々と物の道理を説いて聴かせる。「なーんも、おまえ、大事にせな長もちゃせ

んとは、おもちゃだけじゃなかぞ、直太。何の道具でん一緒たい。手加減てろん力加減てろん、物ば良か按配に扱うこつが大事たい。扱い途ば間違ゆんなら、すーぐ壊るっとがあたりまえじゃろだん、なあ、直太……」

要するに、だ、

――物は何でも、いたわりながらじょうずに使えば、長もちする。逆に、手荒く邪険に、粗雑に扱えば、短命に終わってしまう。そこに、遊び道具たるおもちゃと他の道具類との区別など無い。それぞれに適した扱い方で接することこそ肝腎なのである。

直太は祖父の話に耳傾けてはいたが、見る見る不満がつのってくる様子で、

「ばってん、直太ただふつうに遊びょっだけばい！　ばってん、何でんすぐ壊るっとばい！」またいつもの反論を繰り返すのだった。だが、それが直太の真っ正直な実感で、嘘を吐いている自覚など寸毫も無い。むしろ、

――おもちゃでも何でも、いったいなんだってこんなにかんたんに壊れてしまうのか？

それが不思議でしょうがない。いったいどういうわけだ？

だが文蔵は、

「ふつうに遊びょんなら、なんが壊るうね（なにが壊れるものか）。よっぽどの無茶ばせんなら、そげんかんたんにゃ壊れんごつ、物っちゅう物は造られとっとぞ」

「ばってん、壊るるもん……」

ベソを掻きはじめる直太に、

「なあ良かか、直太、物ちゅう物はくさん、ふつうに正しゅう扱いよるうちゃ滅多な事っちゃ壊れんごつ、そげん造られとるはずとぞ。そらおもちゃでん何の道具でん同じぞ」

つまり、

――そうそうかんたんに壊れるはずも無い刀が壊れるのは、直太の扱い方にこそ問題がある。無茶な遊び方を改めぬ限りは、あと何本買ってやっても同じ事が繰り返されるばかりだ。

「ふつうに遊びょんなら、なんが壊るうね！」

「そげんいうたっちゃ……」

そんな事いったって、直太だってふつうにチャンバラごっこをして遊んでいるだけだ。少なくとも自分ではそのつもりだ。それなのに、暫く遊んでいるうちにいつも同じところがふにゃついてきて、さらに遊び続けるうちふにゃふにゃになり増さって、裂け目まで生じていよいよ、ぷらぁ～んぷらん……。もう厭だ、こんなのまともじゃない、まともに遊べやしない！

「わかったか、直太？」

わかるもんか！　納得のいかぬものを、いったいどうわかれというのか？

だがしかし、文蔵がいつも繰り返しいうには、

「まぁちぃった力ば加減して、程良う手加減して遊ばやこて（遊ばなくちゃ）。そげんして遊ばんなら、大事にすりゃ長もちする物でん何でんすーぐ壊るっとたい――」

まるでそれが、文蔵の直太に与えた遺訓でもあったかのように、その翌日あたりから文蔵の容態は急変した。それ迄はどうにかもち堪えていたのが、急な坂でも転げ落ちて行くかのように悪化の一途を辿った。入院して開腹手術を受けたが、文蔵の躰に巣喰った悪性の腫瘍――胃にはびこった癌細胞――は食道や他の臓器にも転移していて、もはや手の尽くしようも無いことを確認しただけに終わった。

文蔵の息子で直太には父である誠人は、文蔵の主治医から呼び出しを受けた。仕事帰りに、彼が国語の教師として勤める高校からも程近い県立病院に立ち寄った誠人は、父親の余命宣告を受けて帰って来た。

――長くもってせいぜい半年。

その事は本人には伏せられたが、文蔵自身、我が命の尽きんとしていることは覚っていた。せめて残された日々を住み慣れた家で家族とともに悔い無く過ごさせようという配慮から、手術の傷口がふさがると家庭に帰された。こうして家族に囲まれ余命が許す限りのわずかな日々を送っていた文蔵に、ついに最期の時が訪れた。

後になって振り返ってみれば実は、味覚が急に鈍ったり食の好みが激変したり、そこへと至る予兆は一二年前からあった。文蔵は、美奈子と直太を連れて出かけると、甘味処によく立ち寄った。なかでも、求肥に白あんを包んだ餅菓子が名物の老舗和菓子屋が店舗の二階でやっている喫茶室は、気に入っていた。そこで彼は、ふたりの孫にホットケーキを取り分けてやって、自分用にはおしるこを誂えたのだが、汁をひと口啜るなり甘みが足りぬと、卓上の角砂糖を手ずから三つも四つも、放り込んでは掻き混ぜ放り込んでは掻き混ぜして、それでようやく満足して美味そうに食べていた。その様子は美奈子がよく憶えていた。他にも、好物だった食べ物がなぜかちっとも美味くなくなったと訴えたり、それ迄見向きもしなかった物が急に食べたくなったりした。

それでも元来は頑健な体質、若い頃に鍛えた躰が動くうちはまだまだ元気、俺は大丈夫だと健康自慢で、日々の努力も欠かさなかった。

毎朝顔を洗う際には、風呂好きの彼が広く造らせた風呂場の東向きの窓を開け放ち、昇る朝陽から大いなる生命力を己が身の裡に取り込まんとするかのように、真冬の寒い朝でも諸肌脱ぎになってまずは柏手を打ち、家内安全と家族の無事息災を祈る。それから暫くは乾布摩擦による血行促進、やがて肌に血の色がさして躰が暖まってくると彼の流儀による体操――一日を大過無く生き抜くための準備運動を欠かさなかった。また、雨の日以外は必ず、直太のあんよも兼ねて散歩に出かけた。晩酌も欠かさなかったが百薬の長を旨とし、若い時分のように度を過ごして泥酔することなど無かった。

その一方で、年齢を重ねるにつれ、まるで自分自身に説いて聞かせるように、

「人間誰でん早晩いっぺんな死ぬとやけん。俺も古希過ぎて

今日迄ようも生き延びた。授かった子らもそれぞれ子を持つ親となり、おかげで十指に余る孫も得た。これでもう、いつお迎えの来たっちゃ、文句の不満のちいう筋合いも無か。そげな事っどんいいよんなら、贅沢のすぎて神罰の当たる――」

そんな達観したふうな事も折に触れいっていたように、己が寿命に恋々としてただ延命のためだけに節制という名の我慢と辛抱に憂き身をやつす、そんな余生の送り方よりはるかに健康的な生を全うして見せた最期ではなかっただろうか。

【四】

幼い直太にとって、祖父文蔵を奪い去って行った「死」という出来事が、いま一つピンと来なかった。直太が被った心理的内傷は、一時的におねしょの頻度が高まるという症状となって現れた。だがどうも、やはり腑に落ちなかった。

もちろん通夜や葬儀と、それに続く初七日や四十九日といったしきたり上の儀式は、一連の流れの中でそれなりの荘厳さを以て行われ、そうした儀式の度にそれなりの人数が集まり散じて、子供なりに非日常的な雰囲気を味わった。殊に葬儀では、たくさんの菊花と共に納棺された儀式の主役たる文蔵の姿、とくに鼻孔に綿を詰められた死顔がいつもと違って異様に映ったし、それに涙する多くの人々の姿は物珍しかった。だが、こうした儀式は四歳児の直太にはすこし慣れてくると退屈を極め、本葬中の長い読経が行われる間もほとんど父誠人の膝枕で熟睡していた。

そうした儀式が文蔵の「死」を契機あるいは起点として催されていることは理解できても、その「死」自体が何なのかという事になると、やっぱりストンとうまくは呑み込めなかった。

むろん虚構上の「死」ならば、白黒テレビのブラウン管からも日々流れ出して来て、直太のような幼子だって慣れっこになっていた。それは仲間たちと太刀廻りを演じるチャンバラごっこでも同様で、見様では殺伐と映る白兵戦を演じる場面が当然その核心部を占めていた。単なる大衆娯楽や、頑是ない子供のする益体も無いごっこ遊びに「死」の実態に関する考察を求めるほうが野暮だといえば、マアそれ迄だが。

けれども文蔵はその「死」を境に、今迄のような姿で直太の前に立ち現れることも、存在することさえも、ぱったりと無くなった。つまりはその、かつては存在した者の絶対的不在という、一人の人間が有から無に帰して終に戻らぬという取り返しのつかなさこそが、「死」の本質であるらしかった。

ところが妙なもので、いちおう頭ではそう理解していたとしても、死んだはずの文蔵がまだすぐ傍に居るかの気配を感じることも、無くはなかった。もちろんそれは、なにかそんな気がするというだけの気の迷い、要するに幻覚だったのだろうが。しかしその文蔵の気配は、ふとした時に直太の意識に忍び込んで来るのだった――。

当時、直太の遊び場といえば、自宅から四軒むこうの境内にぶらんこと滑り台のあるお稲荷さんと、家の前の狭い通り

を挟んで斜向いにある、直太と同い年のじょっちゃんこと浄海という跡取り息子のいる延応寺という真宗のお寺だった。そこいらではチャンバラごっこにも打ち興じる他に、鬼ごっこや隠れん坊などもして遊んだ。

「隠れん坊する者、この指とまれぇ～」

隠れん坊の鬼になって、鬼が守る陣に見立てたお堂の前の柱に目を伏せた直太が、「もういいかぁーい？」と声を張り上げて問えば、「まぁだだよぉ～」と仲間たち。幾度目かの「もういいかぁーい？」に答える「もういいよぉ～」の返事を合図に、物陰に潜み隠れて息をころしている彼らを探しはじめる。こんな時、ふとした刹那に、それはまことに幽き感覚ではあったが、

――あッ、じいちゃん、ああッ、じいちゃんね……？

文蔵の居る気配を間近に感じた。だがそれは、直太や仲間たちのように生者然とした、呼吸し熱い血液が全身を巡っている者の、いかにも体温が伝わって来そうな存在感とも違って、線香の煙をもっと薄ら透明にしたような煙が、どこからともなくふわりと漂って来て、直太を包み込むともなくたゆたっている、まずはその匂いだった。文蔵が長年喫いつづけてきた煙草の、天辺が薄くなった頭を撫でつけていたポマードの、そして……。それらが混然としたような、生前の祖父が身にまといつけていた体臭が微かに匂って来て、息づかいや野太くてすこししゃがれた声の感じ、頬笑みかけて来るときの面影と眼差し、抱かれたときの骨張った肌触り……。記憶の中のそれらが連鎖するように引き出されて来ては甦り、直太の裡に現在化されるのだった。直太が文蔵を感じるにはそれでじゅうぶんだった。

祖父文蔵の死から未だ半年とは経たぬ春の午後――。

直太は年中の「つき組」から年長の「ほし組」に上がったばかりで、相も変わらずチャンバラごっこに夢中だった。その日も、幼稚園から帰って来てスモックを脱ぎ捨て、母節子から貰ったおやつを食べ終えるや、文字どおりの押っ取り刀で近所の遊び場へと向かおうとしていた。近所に住むいずれも学齢期前のチビ助たちの間で、すでにいっぱしのチャンバラ小僧として認知されて以来、直太をもう以前のようにみそっかす扱いする者はいなかった。

仲間たちが、通りを挟んで斜向かいにある延応寺に居るのか、それとも四軒むこうのお稲荷さんに居るのかは、行ってみなくちゃわからない。だが、彼らはたぶんチャンバラごっこをしているだろうと予想され、敵味方に分かれて白兵戦を演じているその真っ只中へと堂々参戦することだけで、直太の頭は一杯だった。だから、おやつのビスケットを咀嚼しては牛乳で流し込んでいる間も、母親の節子が、

「こないだみたいにあんまり遠くに行かんとよ。迷子になったり、掘割に落ちて溺れたり、人さらいに攫われたりするけんね、危なか。……道ば渡るときゃ、車が来よらんか右左ばちゃんと見て渡らないかんよ。跳び出すと轢かるっけんね。

……帰りは、あんまり晩うなるといかんよ。まだ明るかうちに気をつけて早よ帰っといで――」諄いくらい注意を促す。
だが、直太の耳にはどうせ半分とは入って来なくて、
「わかっとるて！」口ばかりの生返事。ちょっと前迄なら、なにかというと母親に抱っこをせがんで、今でも気分によっては膝に乗って抱きついて来るくせに、その時の素っ気なさと来たらどうか。気持ちはすでに遊び場めざし家の外へ飛んでっていた――。
直太が手にするのは、文蔵から最後に買って貰った三本目の刀だった。その刀だけはまだ最初の何ともないうちから、最大にして唯一の弱点である鐔元をビニールテープでぐるぐる巻きして固定し、予防的補強策を施しておいたのだ。それが功を奏して例外的に長もちしていた。だが、それでもやはり数カ月が経てばすこしずつ、例のふにゃつきの兆候が現れかけていた。もしそれが駄目になったとして次のを買って貰えるあてなど、文蔵亡き後、もう無い。だからその一本だけは、この先もなんとか長もちさせたい、直太なのだった。
やがてお稲荷さんの前まで来てみると、刀を腰に差したり背負ったりしたいつもの顔触れが、赤い鳥居をくぐって出て来るところだった。
「チャンバラ為ぇんと？」
直太が怪訝におもって尋ねると、お寺のじょっちゃんこと小宮山浄海が、
「ちょうど直ちゃんば迎えに行きょった。どっか探検しに行こい（行こうよ）！」
いつもより張り切った様子で、いった。そして、腰のベルトに差した鞘から、しゃッ、と勢いよく抜刀して見せた。
「うわいたアーッ！」直太の口から驚きの声がもれた。すっかり目を丸くして、「わへェー、鉄の刀やんね！」
じょっちゃんの刀だけが仲間裡で唯一、刀身が鉄で出来た「鉄の刀」に変わっていたのだ。
「なんッ、ちょッ見してん（ちょっと見せてごらん）……」
じょっちゃんは、彼の大事な大事な新しい刀を一時的にせよ直太に委ねることを拒んだ。だが、見せびらかして自慢したい気持ちには抗し難い様子で、
「ほら、見してやったい――」直太のすぐ目の前に刀身をかざして見せた。
その刀身は、細く切り出された薄い鉄の板を、峰側で二つ折りになるよう折り返して造ってあって（そのため反りの無い直刀なのだった）、むろん実際に切れそうな刃など付いてはいなかったが硬くて、もし本気で撲かれようものならとても痛そうだった。つまり、直太たちの合成樹脂製の刀とは段違いの桁違いに強度と耐久性にすぐれ、そのぶん相当な破壊力というか、つまり威力を秘めていそうだった。表面が銀色のメッキ仕上げで冷たげに輝いていて、そこに赤い塗料で血溝の線まで引いてあって、鐔も何かの金属製なら束には鮮やかな山吹色の組紐が巻いてあって、黄金色に照り映えていた。まるで殿様が持つ名刀みたいで、直太たちが持っている、薄

皮状に延ばした合成樹脂で出来た、中身がすっからかんで張りぼて状の刀とは、どこからどう見たって大違いだった。
「うわいたアーッ、ほんなもんのごたッ（本物みたいだ）！」
直太の素直な反応に、じょっちゃんは得意満面、
「凄かろォ、ねえ、良かろうがァ～！」臆面も無く自慢して、
「おとうちゃまにお願いして、久留米のデパートで買うて貰うたとばい！」と訊かれてもいない事まで上機嫌で報告した。
「ふうん、良かねぇ～ッ！」羨望を露わにする直太。実際、物欲しげで切なそうな様子が、羨ましくて堪らぬ内心を余すところ無くさらけ出していた。
なるほど、これで「どっか探検しに行くばい！」の謎が解けた。そんな頼もしい刀が手に入ったので、さっそくそれを携えて冒険したい気分になったらしかった。それで、他の連中も誘って出かけようするところだったのだ。
「ねえ、早よ探検しに行くばい！」と、じょっちゃん。
だが直太は、みそっかすは疾うに返上したとはいえ、仲間たちの尻馬に乗ってホイホイとついて行ったものかどうか、迷っていた。家を出て来る際に母親に諄々と念を押されていたのも、まんざら理由の無い事ではなかった。
つい先日も夕方ちかくなって、まるで想い出に誘われたかのような心地になった直太は、そのぼんやりとした心地のまま、在りし日の文蔵に手を引かれて歩いた散歩道を独り辿って、歩いて行ったのだった。堀端に出ると、摘み取った柳の葉っぱを掘割の水面に浮かべ、しゃがみ込んで飽きずにぼうっと眺めていたところを、直太を見憶えていた文蔵の知り合いが保護して、無事に家まで送り届けてくれた――。
そんな事があったもので、
「直太、あんたねえ、独りでひょこぉ～ひょこ出っさるきょって（出歩いていて）、河童にどん引っ込まれて掘割に落ったら、どげん為ンね？　溺れ死ぬたい！　鬼のごつ恐ろしか人殺しに攫われどんすんなら、どげん為ンね？　生きちゃ戻って来られんとばい！　危なかけんね、自分で遠くにやら行かんとよ！　わかったね？――」
母親に限らず家の大人たちからは口を酸っぱくしていわれつけていたので、誘われたからといっておいそれとは踏ん切りがつかず、思案の中にいたのだ。
そんな直太に、いい出したら聞かぬお寺のじょっちゃんが、
「直ちゃん、行かんと？　ねえ、行こい（いこうよ）！　みんな行くげなばい、もーう、行かんと絶交やけん！――」
直太にゼッコウの意味はわからなかったが、なんだかもう行くしかない心持ちとなった。自分だけ一人とぼとぼ引き返すのも厭だったし、仲間たちとはぐれて迷子になりさえしなければ、ついて行っても大丈夫そうな気がした。
こうして各自が己が愛刀を帯びた姿で、沖端川方面へと歩みを進めて行った。直太にとって、生前の文蔵に連れられて方々歩き廻った中で、その川の方へ行くことも無くはなかった。だが、友達どうし子供だけで行くのは、初めてだった。

鍛冶屋町の家の前の通りを北の方角へと道なりに歩いて行くと、地元では「しおがわ」と呼ばれている沖端川と、そこに架かる古い木造の「みなと橋」の袂に出る。

沖端川は、その小さな城下町の外れをゆるやかに蛇行して流れ、干満差の激しい有明海へと流れ込み、満潮時が迫ると水が河口から川上へ向かって逆流して来た。一帯は汽水域で、鯉や鮒、鰻や鯰などの淡水魚はもちろん、満ち潮に乗じて遡上して来る鯊や鰡、それにこの内海独特の魚で醜怪な容貌を持つワラスボなどの海水魚の姿も見られた。だから水が澱んで魚の居付きやすそうな箇所を狙って釣りをする人の姿もよく見られ、文蔵も、とくに戦後の耐乏生活中には趣味と実益を兼ねた釣客の一人だった――。

さて、一行は興奮してガヤガヤとおしゃべりしながら直太の家の前を通り過ぎて、その川の方へと歩いて行った。途中、ゴンと擦れ違った。直太の家といっしょで昔は鍛冶屋だった小さな鉄工所の飼い犬で、いつも放し飼いでその界隈をウロついていた。直太らチビ助たちの目には大きく見えたが、すでに見るからの老犬で性格はおとなしかった。直太が後ろを振り返ってみると、遠ざかって行くゴンの黒ずんだ大きなふぐりが暢気そうに揺れていた。

川の手前まで来た一行は、みなと橋を対岸の船津のほうへと渡るのは止して下流の、西の方角へと伸びる小径に歩みを進めた。そこの角にある床屋の外壁には小さな祠が設けられ、大きな鯛と釣竿を持つ恵比須様の石像が祀られていて、覗き込む直太に頬笑みかけて来た。神社仏閣がやたらと多い街は小さな神々も至る所に祀られていて、市井に暮らす人々を見守っていた。文蔵と散歩に出ると直太も小っちゃなお手々で合掌し、「まんまんちゃん、あっあん……」といって拝んだ。すると文蔵がさも愛おしげに頭を撫でて褒めてくれたものだ。

右手には道沿いに堤防とそれに続く土手がずっと続いていて、左手には田んぼが遠くまで広がっている場所に出た。土手の斜面には、土固めの笹竹をはじめ薄や蓬などの野草が青々と生い茂っていたが、その中を登って行く幅の狭い石段を見つけ、そこを一列に並んで登り切ってみると、土手の上にも一筋の川沿いの道がずっと川下のほうまで続いているのだった。ただ貝殻を敷いただけの未舗装の野道で、トラックやリヤカーが往き来する轍が道としての体裁を保っていた。

その土手に登ると視界が劇的に開け、ふだんひどく平坦な地形の中に暮らしている者にとっては、珍しく起伏に富んだ風景が一望できた。川の方へと視線を転じると、葦の群生が河原の地面を覆って、川っ縁まではモシャモシャとした感じで続いていた。一行は土手の上からそこの葦原に降りて行って、足下をガサゴソと逃げ惑う何百匹とも知れぬ蟹たちを追い散らして遊びながら、川っ縁の漁船が係留してある所まで行ってみた。その漁船は彼らの目には物珍しかったが、水に浮いていないところが精彩を欠いていた。今が干潮時らしく、川の水といえば水流によって抉られ谷になった最深部を、細々と流れているだけだった。漁船は、潟海から満ち潮に乗っ

て運ばれて来て堆積した粘土質の泥が乾きかけている川底に、べったりと腹這いの状態で横たわっていた。

彼らはその見慣れぬ光景の中を暫く探索していたが、そのうち飽きた。すると、

「ねえ、ここでチャンバラごっこば為ぅい（しようよ）！」

いい出したのはもちろん、お寺のじょっちゃんだった。彼は、彼の鉄で出来た新しい刀を、いつもと違う場所や風景や状況において、ふだんとはひと味ちがった新鮮な気分で存分に振るってみたくて、その遠征を発案したのだった。だから、その所期の目的を果たさんと誰よりも張り切るあまり、目をギラつかせていた。

彼らは葦原の、彼らの背丈の二三倍はゆうにある葦と葦との間を動き廻って、暫くはチャンバラごっこに興じていたものの、やがて中断を余儀無くされた。仲間裡で湧き起こった悶着が原因だった。

そもそもチャンバラごっことは、それ自体が太刀廻りを演じる白兵戦の真似事だから、興がのってくると夢中になるあまり、つい殺気だってくる感じが付き物だった。しかし遊びである以上は、幼き者どうしとはいえ参戦者全員が、

――ほんなこてケンカ為ょるわけじゃなかとやけんがら、相手が痛うなかごつ、お互いに怪我やらしぇんごつ為ぇにゃ出来ん。

そうした原理原則的な了解事項を共有し遵守してこそ、安全な遊びとして成立するのだった。

が、いざ始めてみるとどうも、ふだんとは勝手が違った。原因はやはり、お寺のじょっちゃんがその日下ろしたばかりの、鉄で出来た新しい刀にあるらしかった。

直太より十ヶ月ばかりも早く生まれ、もうすぐ六歳になろうとする彼は、年の割に分別臭いところもあって、刀身が鉄で出来た刀で生身の直太たちをほんとうに打ッ撲くなどといった、そんな手荒く無茶な真似などもちろんしはしなかった。お寺の住職と坊守を務める親たちからも、「余所の子に怪我さすっごたる、そげな非道か事ぁ絶対にしちゃ出来んよ」と釘を刺されて、肝に銘じてもいた。物の弾みにせよ、もし誤って生身の躰にまともに当てようものなら、

――飛び上がろうごつ痛かろ！

だから、いざチャンバラごっこを始めたはいいが手心を加える必要から、存分に振るうなどとても無理だった。それでもその、よんどころなき中途半端な状態に甘んじて、辛抱していた。直太とは違って自らに手加減・力加減を課し、感心にも自重に努めていた。

ところが、直太と太刀廻りを演じてゆくうち、やや強めに打ち据えてやりたい誘惑に駆られた。直太は猪武者で、なんでも力一杯ガムシャラにやろうとするので、その熱気に感化され挑発に乗ると、つい本気にも真剣にもなりがちで、傍から見ていても冷やりとする瞬間が度々廻って来た。一年前迄なら内弁慶で、外で余所の子と遊ぶようになってもみそっか

すに甘んじていた直太が、人が変わったように大胆不敵に刀を振るうのだから、浄海としては自慢の刀が仇となってのやりにくさという、なんとも皮肉な事態に陥ったものだった。
そんな浄海に対し、直太は直太で、
――自分だけ鉄の刀で為ょんなら強かに決まっとろもん！
彼我の得物の差から来る不公平感や不満を、自分はそんな鉄の刀なんか買っては貰えまいとの悲哀やさみしさ、つまり一種のやっかみ根性を、そのやすっぽくてちゃちな合成樹脂製の刀に込め、ムキになって打ち込んで行くのだった。
おかげで浄海はいよいよ、鉄で出来た刀身の威力をこれでもかと見せつけてやりたくおもいながら、それが鉄製だけにそういうわけにもいかず、自縄自縛のジレンマに陥って、もやもやと欲求不満をつのらせるのだった。
直太が、そんな浄海の気も知らずに、まるで彼の神経をわざと逆撫でするかのように、
「ふんッ、おぬしだけ鉄の刀てろん何てろんちゅうて威張りょったっちゃ、じぇんじぇん大した事無かのオ！　無駄やん、駄目やん！」嘲笑まじりに、鉄の刀をか浄海をか、それとも両方をか、小馬鹿にしてナメた口を叩いた。
これにはさすがのじょっちゃんもカアッと頭に血が昇って、
「なんちね（なんだと）！　よーし、そんならこン刀の威力ば見してやる！」
矛先を、直太の生身の躰が駄目ならと、直太の刀に向けたのだった。つまり、その刀身が鉄で出来た頑丈な刀で思いっ切り、直太の合成樹脂製の刀を強く打ッ撲くという、そんな戦法に出た。そうなると、もう勝負にならない。刀どうしぶつけ合って斬りむすんでも、じょっちゃんの鉄の刀はヘッチャラでビクともしない。一方、直太の刀は、忽ち例のふにゃふにゃがひどくなり増さって、とくに鐔迫り合いなんかするとくねくねして、とてもじゃないがもち堪え得ず、その致命的欠陥である脆弱性を、もちの悪さを改めてさらけ出した。材質による強度と耐久性の差が歴然となった――。
ふたりの対決を周りで見ていた仲間たちもワァーッとかオォーッとかどよめいて、
「強か、強か！　さすが鉄の刀は違うばい！」
絶賛するものだから、ふだんから何かと恰好つけたがりのじょっちゃんの喜ぶまいことか。得意満面を取り戻して、
「ざまあみろ！　俺の、こン鉄の刀の威力をば見たか――」
直太は、そんな浄海が憎たらしくて堪らず、そのうえ、
――これじゃ勝負にならん！
いくら剛情っ張りでも、圧倒的優勢に驕る相手に劣勢からの反攻、挽回、逆転などさすがに無理と堪りかね、ふにゃふにゃになった刀を殊更にふにゃつくように振って見せ、地団太踏みながら、
「じょっちゃんが刀だけ鉄やけんがら強かつがあたりまえやん！　こすかァ（ずるいぞ）、こン奴ぁ卑怯かもん、卑怯者やん――」何を今さらの感もあるが、浄海を口を尖らせて罵ってやった。父誠人の訓戒によると、男子にとって卑怯は悪

徳の最たるものだった。ゆえに「卑怯（者）」こそ最も痛烈な罵倒語たり得て、そういって詰られた屈辱は堪え難いものがあるはずだった。「――じょっちゃんの卑怯者がア！」

だが、そのせっかくの罵り言葉も浄海には響かなかった。むしろ勝ち誇る者の余裕で、

「そげんいうなら、直ちゃんもこげな良か鉄の刀ば、早よ買うて貰うたら良かやんね！」もうすっかり余裕綽々、自分の刀の、その陽光を反射して輝く刀身を高く掲げ、誇らしげに見せつけながら、「いつ迄ンそげな、すぐふにゃふにゃになる刀で為ょったっちゃ、つまらんばい！　直ちゃんも早よ、こげな良かつば買うて貰わな――」

直太だって、そんな事くらい百も承知だ。だが、祖父文蔵が身罷ってこの方、いったい誰にねだって買って貰えというのか？　そうおもっていると、浄海が、

「直ちゃん家のおじいちゃまは死んなはったげなばってん……」まるで直太の弱点を抉るような物言いとは裏腹に、むしろやさしげ口調で、「ばってん直ちゃん家のおとうちゃま、おかあちゃま、おばあちゃまも居んなはっとやけん、お願いして買うて貰うたら良かやんね」

「ぐう……！」直太は唸ることしかできなかった。

「ほんなこつぁ直ちゃんもこげな鉄の良か刀ば欲しかとやろォ、ねえ、欲しかとやろもん？　僕だけ持っとるけん羨ましかっちゃろォ？　ねえ、ちがうと、そうやろォ……？」

直太は、

――さんざん見せびらかしておいて、なにが「……欲しかとやろォ？　……羨ましかっちゃろォ？」だ、バカ野郎！

浄海がお為ごかしに何かいえばいうほど腹が立った。

だが、もっと腹立たしいのは、

――直チャン家ノオジイチャマハ死ンナハッタ……云々。

直太だって、彼から文蔵を奪った死の「永遠の不在」であることはさすがに観念していたが、それを浄海が勝ち誇った顔で殊更にいうものだから、その為たり顔の厭な感じも手伝って、一発くらい打ッ撲いてやらないことには気が済まぬような心持ちになった。

「あアせからっさ、そげな鉄の刀てろん欲しゅうでんなか！」怒りをすでにふにゃふにゃになった刀に込めてぶつけてやろうと、さらに激しく打ち掛かって行った。「じいちゃんが事ばいうな、じょっちゃんのバカっ！」

すると相手は、自慢の刀で易々と受け止めて楽々と弾き返したではないか。直太にはそれがまたよけい癪に障って、ほんとうに打ッ撲いてやろうと血相変え、怒りにまかせて無茶苦茶に刀を振るった。

「じょっちゃんのバカっ、バカっ、バカっ……！」

だが、もう直太の刀は例の予防的補強策もすでに限界を超え、ただふにゃふにゃするばかりで威力は無く、それを浄海の鉄の刀は逆に、ぱしッ、ぱしッ、ぱしッ……と勢いよく撥ね返した。鉄の刀の威力を再び誇示する絶好の機会を与えられたようなものだった。そうこうするうち、ふにゃふにゃだ

った直太の刀はいよいよふにゃふにゃふにゃあ～となり増さって、ついに、
――ぷらぁ～んぷらん。
あア、この末期症状が出てしまうともうおしまいだ。だが直太は、熱くなるともう猪突猛進しか能のない奴だから、
「バカっ、バカっ、バカっ、バカっ、バカっ、バカっ……！」
そしたらじょっちゃん、直太が空元気で振るう刀の為体を見ていよいよ勝ち誇り、どこで憶えたか、
「無駄な抵抗はやめよ、武器を捨てて降参せよ！」などと余裕綽々の様子で戯れ事をいっていたかとおもうと、さすがに直太のバカ呼ばわりに腹が立ったと見えて、
「直ちゃんがごつ（直ちゃんみたいに）人ばバカちいう者がほんなもん（本物）のバカげなばい――」どこで教わって来たか知らぬが妙な理屈で、直太こそ本物のバカだと宣言すると、守勢から一転攻勢に出て来た。
今度はじょっちゃんが真っ向唐竹割りに来るのを、直太が下から払い除けた、つもり。だが、刀はすでにハリもコシも無きに等しく、風にだってなびきそうな軟弱化ぶりを示して、
――へにゃ～。
鐔元から大きく折れ曲がった。これじゃあもう疾うにチャンバラどころじゃない！
じょっちゃんは己が刀の威力をもうじゅうぶん見せつけ得て満足らしく、
「どうだァ、見たかァ、未熟者ォ～！」嘲笑と冷笑と憫笑の入り交じった嗤いを満面に浮かべて、いった。そればかりか、白眼を剝くと同時に思いっ切り舌を下顎の方へ突き出した可笑しげな形相を浮かべ、またその顔を細かく揺すりたてながら「うぇえェ～！」と冷やかすような奇声を発した。それから、さっきバカ呼ばわりされたお返しとばかり、
「直ちゃんの、バーカぁ！」
ひどく念の入った感じで力強くいい放った。
直太は、負け惜しみで何かいい返そうにも、己が刀が刀では、その気力すら消え失せ、
「好かぁーん！　もう帰る――」
踵を返すと土手に向かって歩きはじめた。じょっちゃんはさびしがり屋で、ふだん直太が先に帰ろうとするとしつっこいくらい引き留めようとするくせに、その時は他にも仲間が居るせいか呼び戻そうとしなかった。あまつさえ、
「ふん、よかったァ。おまえてん（おまえなんか）さっさ帰れ、早よ帰れ！」追い払うような手真似まで交えて、いった。
「おまえにやらいわれんでん（いわれなくても）帰る！　せからしか――」
彼らに背を向けた直太は、背丈の何倍もありそうな葦を掻き分けて河原を進むと、土手の斜面を這うようにしてよじ登り、その上の野道に出ると仲間たちのほうを振り返った。が、葦の蔭に紛れて見えないので諦め、夕陽を背に独りトボトボと歩きだした。足下から前の埃っぽい地面にずいぶん長々と細く伸びた自分の影法師だけを道連れに、帰路を辿りはじめ

た。

家路を辿る道すがら、

「じょっちゃんのバカ、じょっちゃんのアホ、じょっちゃんの卑怯者……！」つい今し方迄いっしょだった遊び友達を罵った。ひとしきり悪罵した後で、どんなに口汚く罵ろうが聞いて悔しがってくれる相手が居なくては、効き目はもちろん張り合いすら無く、いえばいうほどイライラがつのって損をした。それでも損得勘定抜きに、苛立ちを唾気といっしょに吐き散らさずにはいられず、「お寺のくそ坊主のバカ……お寺の、くそ坊主の、バ〜カ！」

そのうち悪口を考えるのも煩わしく、おなじ台詞を繰り返すのにも飽きて、ただ益体も無く小競り合いした余熱だけが残っていて、誰が最初に考えたのか知らぬが、

「バ〜カァ、ア〜ホォ、ちんどん屋、おまえのかあちゃん出べそォ〜……」おきまりの囃し文句が出た。意外とのんびりした節の付いたそれが、鼻歌でも口ずさむように自然と舌の上から転がり出て、わりと大きな声で朗唱、放吟するような恰好になった。「……電車に轢かれてベッチャンコ〜、空気を入れたら元どおりィ——」

すると、素っ頓狂な直太の声に驚いたらしく、

「ピーピーピーピーピーピーピー……！」

けたたましい喧騒が、眼下の葦原の中から湧き起こり、一羽の小鳥の姿となって舞い上がって行くのが見えた。それも、まるで尻に火でも点いたかのようにせわしなく鳴きかつ羽ばたき、小さく円を描きながら。

直太はおもわず足を止め、その声の主の旋廻しつつ上昇して行く様を目で追った。その小鳥が雲雀と呼ばれる野鳥の一種で、群生した葦の中などで営巣し雛を産み育てることも、外敵が近づくと直太がいま見ているような陽動作戦に出て、敵の注意を巣から他へ逸らそうとするらしいことも、未だ何も知らなかった。ただ顔を仰向け、夕空を背景に目で追いつづけた。雲雀は高く昇るにつれてますます小さくなり、やがて針でつっ突いたような一点と化した。それでもまだ警戒を解かず、ピーピーピーピー囀っている声が高く昇ったぶん遠くから、直太の耳に届いた。やがて鳥の姿は橙色に染まった夕空の光に紛れて見えなくなったが、声だけは幻聴のように耳に残り、どこ迄も舞い上がって行った果てに昇天してしまいそうだった——。

その小さな野鳥のおかげで、気分も幾分かは晴れた。その春の日の夕空も晴れ渡って、足を止めたついでに周囲を眺めまわすと、対岸の菜花の黄色が目に染みた。何の気無く眺めた夕景が童心にも深く沁み入って来たのは、おそらくその時が初めての事だったろう。

その季節にしては大気が澄み切っていたせいか遠目が利いて、夕陽がこれから沈んでゆこうとする西の方角の天地の境に、ふだんは見慣れぬ山の姿が水墨画のようにうっすらと浮かび上がって見えた。直太が未だ知らぬその山の名は、雲仙

岳といった。活火山として有名な雲仙は、直太がいま居る土手の傍らを流れる沖端川が流れ込む有明海を隔てた対岸に位置していた。折しも西に傾いた橙色の夕陽は、黒みがかった山容の仄見えるその山の稜線の彼方へと、燃え落ちてゆきつつあった。

直太には何かしら彼の気を惹く光景に出逢うと、時が経つのも忘れて見惚れてしまう癖があったが、その時も魅入られたかのようにぼんやり眺め入って暫し飽きなかった――。

春の彼岸も過ぎて日が経つごとに日足が延び、空はまだ残照で明るかったが、日暮れ時が迫っていた。

直太が途中で道草を喰いながらも「しおがわ」に架かる「みなと橋」の袂まで戻って来て、そこの恵比須様が祀られた角を一つ曲がった途端、俄かに視界が暗くなった。背中を仄暖かく照らしていた陽射しが家並みに遮られた途端に夕闇が舞い下り、人も犬も猫も乗り物も路上の景物がすべて影絵の中のそれらと化したので、その急に取り澄ましたような素っ気ない風情に、直太はさびしさを覚えた。母節子をはじめ、直太の帰りが晩いのを案じているであろう家の者の顔が、眼間に浮かんだ――。

と、その時だ、

「直太ア……」耳元であの懐かしい声が忽然と甦った。

おもわず足を止めて四囲を見まわす。姿は見えなくても、そのすこししゃがれた野太い声で呼びかけられれば、それが誰かはすぐにわかる。

「じいちゃん！　どこねェ、どこ居っとォ？」

だが祖父文蔵の姿は見当たらず、ただ生前とおなじあの、煙草のヤニ臭さとポマードの香料の入り混じった匂いが、幽く漂って来て、

「うちの直太は、まァーた、おもちゃじゃいろ何じゃいろば（おもちゃだの何だのを）壊しょらんかね？」その物言いも、ちょっとからかうような声の調子も、生前と変わらない。

「うんにゃア、直太、刀やら壊しよらんよ――」

直太は澄まして答えた。そのくせ、彼が文蔵から最後に買って貰った三本目の刀もすでにふにゃふにゃになっていることだけは、絶対に知られたくないのだ。だから話を逸らそうとして、

「じいちゃん……、じいちゃんな、どこ居っとね？」

だが、その魂胆も文蔵にはお見通しらしく、

「ほーら見てみん、チャンバラごっこの刀でん何でん、すーぐ駄目ん為かすじゃろが――」

すると直太は必死の弁明を試みる。

「そげんいうたっちゃ、じょっちゃん、こすかとばい（狡いんだよ）！　自分だけ鉄の刀ですっとやけんが……、鉄の刀が強かに決まっとっとに為っけんがら、直太の刀がこげんふにゃふにゃになったとよオ！　じょっちゃん卑怯かもん！」

直太としては果敢に闘ったものの、刀身が鉄で出来た刀の威力の前には歯が立たず、文蔵から三本も買って貰ったうち

最後の一本も、ついにこの為体――。ついでに、浄海にバカといってやったら、先にバカといった方が本物のバカだといい返され、とうとう独りぼっちで帰って来ざるを得なくなった悔しさも蒸し返されてきて、「もうじょっちゃんてろんな、直太好かぁーん！――」

「あらら、そら残念、そら為様ン無か。ふうん……」

文蔵は直太の言い分を認めたようだった。直太は、

――あアやっぱり、じいちゃんは直太の味方だ！　じいちゃんならわかってくれるとおもってた！　じいちゃんに打ち明けて良かった！

そうおもって安堵し、つい油断していたら、

「ばってん、直太、何でんおなし事っぞ（おなじことだぞ）。まぁちぃったオマエ、程良う力加減ばせやこて（しなくちゃ）。何でん力まかせに手荒う扱うけんがら、長もちゃせん。すーぐ壊れて、すーぐ駄目ンなって、ホラすーぐ終ぇン為かすじゃろがァ……」その物言いは、からかい気味にたしなめる感じも同じなら、ゆるく節をつけていう感じも相変わらず穏やかさに終始した。「……そりでまた、すーぐ新しかつば買うて貰うばってん、またすーぐ壊すけん、結局おなし事っじゃろが。なア、直太ア――」

だが、ふつうに遊んでいるうちにおもちゃが、自分で、ひとりでに、勝手に、自然と、壊れるのだとおもっている直太にとっては、その至って当然の事を、直太のじいちゃんともあろう者がなぜわかってくれないのか！　不満と苛立たしさに、丸々とした頬をいっそうぷくうっと餅のように膨らまし、口を尖らせ、

「そげなカゲンやらいうたっちゃ、直太まだ子供やけん為ィきらんもん！」抗弁する。まだ幼子の自分に手加減だの力加減だのと小むつかしい事を要求してくれるな！　いった尻から悲憤がこみ上げ、半ベソ掻きながら、おもわず、

「カゲンやら、そげなと直太好かァ～ん、いっちょん好かん、厭ァ～ばい！　そげな事して遊んだっちゃ、おもしでんなかッ（おもしろくもない）！」いっているうちにますます激した挙句、叫んでいた。「直太、壊しとらんよオ、じいちゃ～ん！　おもちゃがじぶんで勝手に壊るっとばァ～い！　もぉう……！」

さっきから何やら独りで、見えない相手に対してさも不満らしくぶうぶう文句をいいながら歩いて行く直太を、通りすがりの通行人が呆れたように振り返っては、擦れ違って行った。だが、彼らの存在すら直太の意識野には入って来ない。そのうち直太は感情が激して、鼻の奥の方がじゅわわッ……と熱くなった途端、下顎がくわッと迫り出す感じで、後はもう顔ぢゅうくちゃくちゃになった。滂沱の涙が溢れ出て、そこへ洟水も垂れて来て合流し、手や袖で掻い拭っても、かえって塗たくり付けたように濡れて顔ぢゅうぐちょぐちょになった。嗚咽まじりの濁った声で、

「カゲンやらばっかりいうけん、じいちゃんもバカだなあ、もうじいちゃん好かァ～ん！――」いうに事欠き、いい放っ

たものだ。
　すると直太の眼間を、ちょうど幼稚園でたまに観せられる幻燈のように、苦笑いする文蔵のちょっとさみしげな面影が掠め、踵を返し歩み去って行く後ろ姿が大写しとなって脳裡をよぎったのも一瞬、ふいに掻き消えていた。我に返った直太は路傍にひとりぽつんと突っ立っていて、さっきより夕闇が濃くなったのを感じた。急に慌てふためき、
「じいちゃん、ねえ、じいちゃん……、じいちゃんて……？」
　差し迫った声で呼びかけながら四囲をきょろきょろ見廻したけれども、今の今迄いっしょだったはずの文蔵らしき人影はもうどこにも無かった。物の弾みとはいえ、「もうじいちゃん好かぁ～ん！」などといってしまったことが悔やまれた。

　直太は家に帰り着く迄の間ずっと歔欷しつづけていた。路上をまだ五歳くらいの幼子がひとり泣きじゃくりながら歩いて行くものだから、往き合うと見るに見かねて声をかけてくれる大人もいた。鉄工所のゴンだって、犬のくせに分別臭げな顔を心配そうに曇らせ、直太が通り過ぎて行くのをじっと見送っていた。前年の晩秋、文蔵が身罷った折には、その死を悼んで哭く大人たちの様子をただ傍観し、葬儀の間も父誠人の膝枕で昼寝していただけの直太だったが、今頃になって泣けて泣けてしょうがなかった――。
　母節子は家の前の通りに出て来て、彼女のまだ頑是ない息子が帰って来るのを待っていた。そして、直太がワアワア泣きながら帰って来るのをみると歩み寄って来て、
「あら、直太、あんたどげんしたとね……、なんば泣きよると？」だがしゃくり上げて泣くばかりの直太の前にしゃがんで、「また誰かにいじめられて泣かされたァ？　今日は誰に意地悪されたね？　うちの直太ばいじむっとは誰ね？……」
　矢継ぎ早に訊いてはみたが、直太は、そうじゃない、そうじゃないのだと駄々をこねるように、かぶりを振って苛立つばかり。ようやくすこし落ち着くと、
「あのねぇ、じいちゃんが、じいちゃんがね……」そういう間にも母親の薄桃色の割烹着に汚れた顔をむやみと擦りつけながら、「手加減ばして……、力ば加減して、おもちゃば壊さんごつ遊ばなでけんよオち、そげんいいなはったもん――」
「あらッ、おじいちゃんがね？」節子は直太のいった事に瞠目すると、幼い息子に改めてまじまじと見入った――。
　そして、やがての事に、
「あんた、おじいちゃんに逢うたとね？　そしたらおじいちゃんが、おもちゃば壊さんごつ遊びなさいち、そげんいいなはったとね？」
　黙って首肯く直太。
「へえ、そんならそン時の事ば、おかあさんにもういっぺんようと話してごらん――」
　だが直太は、丸々とした小っちゃな躰と顔をむやみと母親に擦りつけるばかりで、もう話そうとはしなかった。節子は、まだまだ稚気満々たる幼い息子の甘えるにまかせ、彼女から

もぎゅうッと抱きしめてやった――。
　彼女はただ単純に、とびっきりのおじいちゃん子だった甘えん坊の直太が、何がきっかけとなったか文蔵にまつわる記憶を甦らせ、さびしさに取り憑かれてちょっと物狂おしくなったまでの事だろうと、そう解釈した。直太はふだんから物に感じやすく夢見がちで、白昼夢の類でもたわいもなく真実だと信じ込む。だからこの一件も、文蔵逢いたさの一念が幻覚を生じさせたのだろう、と解釈することにした。

【五】

　直太の丸一年以上にわたって続いたチャンバラごっこ熱も、刀身が鉄で出来た刀を持つお寺のじょっちゃんこと小宮山浄海と沖端川の河原でやり合った日を境に、まるで憑き物が落ちたかのように急速に冷めてしまった。
　とはいえ一度は、
「刀がまたこげんへにゃへにゃになったけん、今度ァ鉄の刀ば買うてェ！　じょっちゃんも買うて貰うたちゅうて持っとっとばい。ねえ、買うてェ！」まず母親にねだってはみたものの、
「そんなら、おとうさんにお願いしてみらんね。お許しが出たら買うてやるたい」
　それならというので、今度は父親にねだってみると、
「鉄の刀やら物騒か！　くわァ～ッ、危なかけん、やめとけ！　怪我すッ――」刀身が鉄製の刀ならたしかに頑丈で、ずいぶんと長もちはするだろうが、「振り廻しょって、もし目どん突こうもんなら、失明すっぞ！　目の潰れて見えんごつどんなるなら、どげん為っか――」
　そんなふうに脅かされ、拒否されると、さすがの直太も断念せざるを得なくなった。余所の子らも、各自の家で直太たち父子とおなじようなやりとりをして、断念を余儀なくされたのだろう。直太と歩調を合わせるかのように、チャンバラ熱そのものが冷めていってしまったのだった。
　肥満児のまっしゃんこと西田正志の弁を借りるならば、
「鉄の刀は良かろばってん危のうして、（値段が）高っかろが。俺ィもとうちゃんから『そげな金のどこにあるか？』ちいわれた――」つまり合成樹脂製の刀の何倍も値が張るので、その点からいっても買って貰いづらいのだった。
　それならと、手ごろな木の枝でも削って刀を手造りしてもチャンバラごっこを続けようとする、そんな子供がいたかといえば、時代がもしあと十年早かったならきっといたことだろう。しかし、高度経済成長の影響は子供の日常生活にも浸透し、遊び道具も工場で大量生産された、主に合成樹脂からなる既製品を買うものだという固定観念が支配的となっていた。つまり、子供もその多くが大量消費社会に絡め取られていたのだった――。
　それにしても、直太をしてまだ五歳という幼い身空で世をはかなませたのは、
――あア、玩具と名のつく物たちの壊れやすさよ！

「直太、なんかオマエ、まァた壊したつか――」
不意を突くような文蔵の声に、
「な、なんね、まァたじいちゃんね……」
慌てて四囲をきょろきょろ見まわしていると、例の調子で、
「まぁちぃった（もうすこしは）オマエ、手加減ばしして遊ばやこてェ（遊ばなくちゃ）。力ば加減して遊ばんけんがら、すーぐ壊るっとたア～い……」生前の文蔵が最晩年を迎えていた頃に、噛んで含めるように繰り返し直太にいって聞かせていた言葉がひとくさり続くのだった。「……そしけんがらいうたろうがて（だからいったじゃないか）、直太、物ばもっと大切に扱わやこてェ～（扱わなくっちゃ～）」
「うーん――」生返事で応じる直太は、だんだん不機嫌になってゆく。直太には直太なりの、相手がたとえ文蔵でも譲れぬ言い分があった。「なァ～ん、そげんいうたっちゃ、直太、遊びょっときに（遊んでるときに）そげな手加減やら力加減やら為ィきらんもん！」半ばげんなりした様子で、ぷっとむくれる直太。
――手加減だの力加減だの、そんな事一々気にしながら、遠慮しィしィ遊んだところで、なにがおもしろいもんか！遊びなんてものは、余念無くのめり込んで没頭し遊戯三昧の極楽境に遊ぶ、そのおもしろさが堪えられぬのだ。それを、いくらおもちゃを長もちさせる方便とはいえ、今にも壊れはすまいかと始終気にしながら遊ぶのなんて、まっぴらごめんだ！　遊び道具に気兼ねするあまり遊びに没頭できないなんて、いったいなんのための遊びなのか……。
「そげなつぁ厭アばい、せからしゅうて（煩わしくて）出来っもんね！」
到底、直太の性に合わぬのだった。だから文蔵の訓戒をよそに、直太自身が怪獣や戦闘ロボットなどの模型玩具を操り、その時々の役になり切って、闘争の劇を演じさせて遊ぶ。そうして独り遊びに余念無く没頭している間は、一種の忘我の境地に達しているのだった。
ところが、好事魔多しとはいったもので、直太のその遊びがいよいよ佳境に、遊戯三昧の極楽境にさしかかったときをまるで見澄ましたかのように、おもちゃの調子がおかしくなる。機嫌よく遊んでいて、これからますます遊びの醍醐味を味わい尽くそうと有頂天になる矢先に、おもちゃが遊び道具としてうまく機能しなくなるのだ。あるいは、その兆候が現れるのだ。そしてついには、ほんとうに壊れてしまって、かえって遊びを阻害する迄に至るのだった――。
だが文蔵亡き後、その事を直太がどんなに悲憤慷慨しようとも、彼の思いをそっくりそのまま受け留めてくれそうな人物はもはや皆無なのだった。それどころか、父誠人と母節子の両親に加え祖母久代という彼の家の大人たちはまるで、直太がとても飽きっぽい子供で、一つの玩具に飽きるとすぐわざと壊しにかかるかのように難じるばかりだった。直太が、そのおもちゃはもともと壊れやすい脆弱な造りの品物だったのだろうと、実感したとおりの事をいっても、

「そげなはずのあろうか！　あんたが為途（扱い方）の悪かったい――」まるで理解しようとはしなかった。

それでも、まだ彼らには鷹揚さというか、なにしろ小さくて愛くるしい直太のすることだからと、「為様ン無か子やねぇ」で大目に見てくれる寛大さがあった。

だがこれが姉の美奈子となると、直太をとことんクソミソに罵らなくては気が済まなかった。彼女の舌鋒は鋭く辛辣で、容赦が無かった。小学校に上がって読書に覚醒めた優等生は、とても一年生とはおもえぬほど語彙が豊富で口が達者なぶん、直太の「おもちゃがじぶんでひとりでに勝手に自然と壊れた」説を、物の道理を楯に論破しにかかった。

「既製品のおもちゃの、そン遊び道具の、ふつうに遊びょるなら、なんがそげん簡単に壊るっもんね――」直太の言い分を問答無用とばかりピシャリと撥ねつけるのだった。「それが壊るっとは、遊び方の悪かけんに決まっとろうもん！」

そこで直太が黙ってもいられず、うんざり顔で彼の自説を主張しようものなら、

「ふんッ、直太の嘘つき！　嘘つきは泥棒の始まりちゅうとよ！」それこそ木で鼻をくくったような態度で、「どうせあんたが事っちゃけん、すーぐ飽きて、飽きたらすーぐ壊すとやろたい！」と全面的に否定し、「あんた、おじいちゃんからも『直太は物ば大切に為ぇんけんいかん』ち、いっつもいわれよったろうがァ。おねえちゃん、憶えとっとよ――」

直太がそれでも自説を曲げずに反論に努めても、もう耳を貸さない。そこからの彼女による追及は仮借が無くて、苛酷なうえにも非常にしつっこいのを常としていた。

「あんたンごつ物ばすーぐ壊すやら、バカじゃなかろうかね、ほんなこて（ほんとうに）アホやなかと？　ねえ、あんたの頭ン中はどげんなっとっとかね？」ここ迄だってたいがい言いたい放題なのに、まだいい足りぬとみえ、「脳ミソがちーったぁ（ちっとは、すこしは）変のぉなっとっとやなかね（変になってるんじゃないの）？　ねえ、クルクルパーで、ひゅうなかごつなっとっとやなかね（変なようになってるんじゃないの）？　ねえ、生まれつき頭が……」

傍に大人が居ればさすがに聞くに堪え得ず、途中から割って入る。「あんた、美ぃちゃんな、さっきから聞いとっと、我が弟に何ちゅう事ばいいよっとね！　いくらなんでん、そらひどか（それはひどい）、そげな言い方ばする者のあろうかい！」

が、姉は弁が立つうえに気が強くて、大人から多少叱られても恐れ入らなかった。

「みんな直太に甘すぎるもん！　甘やかすけん、こげなわがままで、デタラメするごつなったとよ！　何でん買って貰うときばっかり気の狂うたごつギャーギャいうてねだるばってんが、買うて貰うたらまたすーぐ飽きてすーぐ壊してしまうとやんね――」

姉は直太に対する最も辛辣な批評家であり批判者だった。やがて直太はそんな姉に対して、彼女とのあいだで、それは

それは厄介な禍根を、根深き遺恨を残すに至る、とんでもない事を為出かすことになる。が、それはもうすこし後の事……。

とにかく直太の中では、おもちゃとは遊びに不可欠な道具でありながら、そのうちのほとんどが大して手荒く扱わなくても「じぶんで勝手に自然と壊れる脆弱な物」という印象が、自ずと凝り固まっていったのだった。

直太は、五歳児なりのおつむりを必死で回転させて考えた。

――自分にはわざと壊すつもりなど微塵も無いのだ。したがって、おもちゃがじぶんでひとりでに勝手に自然と壊れるのだとしかおもえない。そうである以上、壊れた原因は壊れやすく造られたおもちゃそれ自体にあったはずだ。

これが飽く迄も直太の偽らざる実感であった。だが、それならどうしてそんなにもちが悪い、ヤワに造られた欠陥品紛いの不良品か粗悪品の類が、遠慮無く堂々とおもちゃ屋で売られているのか？　その疑問について、未だよく物心がつかぬなりに、自身が子供であることを理由にどうも侮られているのではないかという気がして、以下のような見解を得た。

――造り手がおもちゃという物に対し、所詮は子供騙しの遊び道具だと高をくくっていはしまいか。つまり、大人がまじめな用途で使用するがゆえに酷使にも耐え得べき実用品とは異なり、未だ年端もいかぬ力弱い幼児が玩弄にさえ耐えればじゅうぶんだ、と。だから、すこしでも長もちするように頑丈に造ることへの熱意を欠き、その努力を怠って造ったのにちがいない。

邪推するついでに、こうも考えた。

――むしろ、わざと脆弱に造っておいて、壊れたらまた次の新しいおもちゃに買い替えるよう仕向け、そのぶん余計に儲けるつもりなのではないか。あのおもちゃの刀がいい例だ。チャンバラごっこ用のおもちゃの割にはもちが悪くて、まともにチャンチャンバラバラやっているとすぐ鐔元から駄目になって、次のを、また次のをと再三買い替えないとチャンバラごっこが続けられなかったじゃないか！

その祖父文蔵ゆかりの合成樹脂製の刀は飽く迄も一例にすぎず、

――おもちゃといえばもう大抵粗悪な半端物で、そんなのが平気で造られ売られているのだ。

とうとうそこまでの妄想、あるいは疑心暗鬼に囚われていた。それならいっそおもちゃなんかとは無縁でいられればよいが、それは遊ぶなというのといっしょだから、無理だ。それが無理なら、

――その脆弱性をひと目で見抜き、見かけ倒しの粗悪品だと喝破できるだけの眼力を備えておればよし。だが、魅力的な見てくれを持つ蠱惑的なおもちゃを見ると、すっかり目が眩んでとても目利きどころじゃない。衝動的に欲しくて堪らなくなってしまう。

「そんなら、どげん為ょ？」頑是ないおつむりを頭痛がしてくるほど搾りに搾り上げ、脳ミソをフル回転、脳細胞をフル稼働させて考え込んだ挙句、苦肉の策に辿り着いた。「ほんなこて（実際に）試して、じっけんしてむっと良かじゃっか！」

つまり、

――耐久実験。

直太にとって何が無念といって、店頭に置かれたおもちゃの見てくれに幻惑されて欲しくなり、ねだってせっかく買って貰い弥増す愛着を抱きながら、遊んでいる最中に壊れられることほどの無念はなかった。その時に味わう幻滅とも落胆とも失意とも痛恨とも呼ぶべき感情といったら、がっかりなどというそんな簡単なひと言では到底かたづくものではなかった。しかもその辛さと来たら、愛着の大きさや惚れ込みようの深さに比例するようだった。

――こんなにあっけなく壊れてしまうとわかってたら、買って貰おうともおもわなかったのに……！

ほぞを噛む後悔に苛まれた。後になって悔やまれるのが後悔で、だからやっぱり後悔先に立たず。するとここに二つの後悔があって、せっかく買って貰ったのに壊れて後悔する場合のが一つ。もう一つは、買って貰わずにずっと欲しくて後悔する場合だ。おなじ後悔するなら、買って貰える物はやっぱり買って貰うとして、未だそこまで強い執着が生じぬうちに、直太自身が己が愛着に縛られてしまう前に、

――そいつの強さ、すなわち強度と耐久性を試してやろう！

乳くさい五歳児の直太がほんとうにここまで理詰めに、己が情理に照らして熟考し得たのかは疑われるが、多くを直観に頼っても必死で考えた末に辿り着いた結果が、その、

――じっけん。

要は、実際に対象物をある程度の強度を伴う試練に曝してみるのだ。そして、一定限度を超えてなおヘッチャラだと見極めがつけば、

――及第、あるいは合格。

直太自らがお墨付きを与え、そうしてはじめて心置きなく安心して惚れ込むことができる、という寸法――。

ただしそこには、ひとつ間違えばただの破壊行為へと堕していきそうな危うさが潜んでいた。とくに直太のような、遊びに夢中になると現実との見境をすぐ無くしてしまう子供には。実際、直太はまるで何かに取り憑かれたかのように、その「じっけん」にのめり込んでいったのだった。

祖父文蔵の死後、さすがにもう彼のように気前よく直太におもちゃを買ってくれる大人はいなくなった。とくに倹約家の祖母久代などは、

「うちの直ちゃんにゃ魂消った！　買うて貰うときばっかり『買うて、買うて、買うて……！』ち気の狂うたごつ駄々こねて、為様ン無かけん買うてやったら一時ゃそればかしで遊

びょるばってん、近頃はどうも見かけんごたるねェちおもいよったら、いつの間にか飽きてから壊してしもうとっとやけんがら、あアもう好かんたらしか！」

直太にねだられ、自分の小遣いから捻出してせっかく買ってやったのに、もう懲り懲りだとの嘆き節が繰り返された。

たしかに直太のおもちゃで完品のまま古びてゆく物は無く、おもちゃ箱の中身は死屍累々たる様相を呈するに至った。そんなおもちゃたちは、いずれも直太の「じっけん」――強度と耐久性を試す耐久実験――のせいでどこかしらに故障なり欠陥なりを抱え、ゴチャゴチャ雑然と積み重なっていった。その「じっけん」の結果、彼らはおしなべて、

――造りが脆弱でもちの悪い粗悪品。

そんな不名誉な烙印こそ捺されてはいたが、だからといって直太がそれらで遊ばぬわけでもなかった。だが直太が彼らに対し、買って貰ったときのような期待や執着を抱くことはもはやできなかった。ただ、半壊状態にされた彼らがおもちゃ箱の中に無造作に放り込まれている様子を概観するにつけ、始末屋でシマリ屋の久代が哀れの情を催して、

「アラ勿体なさ！　なーしけん（なぜ）そげんすーぐ飽きて、飽きたら壊るっごつ手荒う扱うじゃろかね？　為っ事だけ見とると憎らしかごたるよ。あア勿体なさ！　そげな勿体なか事ば為ょっと神罰の当たるよ――」

嘆き節に乗せて叱言をいうのも無理はなかった。

――勿体ないことをすると神罰が当たる。

それが久代の口癖だった。彼女の人となりには、この国が戦争に敗けて夫の文蔵と五人の子供らを連れて台湾から引揚げて来てからの耐乏生活、その中で舐めさせられた辛酸の記憶が依然として影を落としていた。だから、たとえ時代が戦後の復興期から高度経済成長期に移行し、大量生産品で溢れた時代が来てもなお、あア勿体なさ――。たとえ使い古された道具類が壊れてきても、まだ何とか修繕して使えるうちはその手間暇を惜しまなかった。捨てずに無駄なく使い切る迄とことん使い続けることが、彼女にとっていちばんの美徳なのだった。

そんな久代ではあったが、亡き文蔵を虜にしていた直太の愛くるしさについ負けて、懐具合によっては、

「たまにゃ良かろたい、そんならばあちゃんが買うてやろ！」

直太ご所望の品を買い与えた。すると直太は、望みの玩具が買って貰えたうれしさを、なんの照れも衒いも無く、小さな躰いっぱい弾けさせるのだ。そのぷにっぷにっと欣喜雀躍するあどけない姿に、久代は相好崩しながらも、

「もうこないだンとんごつ飽きて壊さんとよ。良かね、直ちゃん、今度また飽きてすぐ壊しどん為ょうもんなら、ばあちゃんなもう金輪際、直ちゃんにゃ何ーんも買うてやらんとやけんね――」釘を刺すのを忘れなかった。

直太は喜色満面で首肯いてみせ、黒眼がちな澄み切った目を久代に向け、

「うん、わかっとる。大事にするけんね、ばあちゃん――」

その殊勝げな様子がまた、彼女の心をとろかすのだった。
そんなふうについ直太を甘やかす郷原家の大人は、久代ばかりとは限らなかった。とはいえ、直太の両親である誠人と節子の夫婦も、我が子に盲目的な愛情を注ぐばかりが能ではないことくらい百も承知していたし、彼らなりの教育方針も無くはなかった。
とくに高校の国語教師をしている父誠人などは、
――直太には物を大切にする習慣を、とくに実践を通して身につけさせることこそ肝要だ。すぐに壊してしまうからと遠ざけてしまっては、大切に扱おうとする機会までも奪ってしまうことになる。それでは本末転倒……。
当時、彼は自宅から歩いて五分ほどのところにある母校で教鞭を執るかたわら、独学で江戸の古川柳を研究していた。そんな文人趣味を持つ田舎のインテリゲンチャ然とした紳士で、けっして頑迷固陋な石頭の、融通の利かぬ田舎親爺といった型の人物ではなかった。むしろ、戦前・戦中・戦後と世の中の支配的な思潮や論調が両極端に振れて遷り変わるのを多感な眼と心で目撃したためか、彼自身はバランスよく穏当な思考習慣を己に課した。
そんな誠人は、直太たちきょうだいの育て方についても夫人の節子と話し合った。直太のおもちゃの件について、誠人たち夫婦の考え方としては、我が郷原家の子供として分相応の、とはつまり法外に値が張る過度の贅沢品は論外として、俗悪すぎない程度の品位を備えた玩具なら、
「たまにゃ買うてやっても良かろうたい」ということだった。ただし、「ばってん、直太が物ば大切に扱うごつ躾くっこつが肝腎たい。今の直太ば見とっと、おやじ（文蔵）が甘やかしきっだけ甘やかしたけんか（甘やかせるだけ甘やかしたせいか）、そらァもう甘えたくっとろうが。今のうちから出来っだけ善か習慣ば身につけさせとかにゃ、将来ロクな奴にゃならん――」
それでも、「直太」という名前だって、誠人自身が真っ直ぐ自由にのびのびと育ってほしいと願って命名しただけあって、直太本人が抑圧と感じるほどの厳格主義はとらなかった。
それにつけても、だ、
「美奈子が今の直太ぐらいン時ゃ、何〜んも心配せんでよかったばってんねえ」
節子の口ぶりが愚痴めいてくる。親たちの口ぶりが直太のこととなると、将来を危ぶむ色合いを帯びてつい愚痴めいてくるのも、むろん直太への愛情ゆえではあったが。
美奈子は直太より二歳半年長の姉で、ちょっとこましゃくれて見えるほど知的な娘だった。小学校に上がってまだ日が浅いにも拘らず、すでに校内屈指の読書家として知る人ぞ知る存在で、
「誠人しぇんしぇいがとこり（所、お宅）の美奈子ちゃんちゅう娘しゃんな、こン子が、まア、ガッコの図書館から本ば次っから次に借り出しちゃあ読まっしゃる、本の虫げなたい。読書家だけあって、ガッコの勉強も申し分なかごつ、まア良

う出来らっしゃっとげなたい――」
優等生という評判が立った。ただしその評判も、片田舎の小さな城下町の中でもごく限られた狭い領域内でのものであることは、割り引いて考える必要があったが。
ではその弟直太はというと、親たちが勝手に想い描く尤もらしげな教育的意図だの、姉という模範的存在だのといっても、どこ吹く風。それより直太の念頭を占めていたのは、
「どうせすぐおかしゅうなって壊るっごたるボロかつ（粗悪な品物）なら欲しゅうでん惜しゅうでんなか！　さっさと壊るっがマシやん！」
そんな無謀な耐久実験を無事生き延び得るおもちゃと早く出逢いたいという悲願だった。

出かけた先で大人たちにねだってやっと買って貰った、テレビ漫画で活躍中の戦闘用ロボットをかたどったプラスチック模型――。
さすがに最初のうちだけは、取り扱いに不慣れなせいもあってか、丁重に取り扱っている。だが、すでにお馴染みの、すでに半壊状態になったソフビ製の怪獣模型なども交えて遊ぶうち、直太の意識の中で次第に新旧の区別が薄まり、両者間の隔壁が低くなってくる。それにつれて、新参者のロボットに対する遠慮――他の物たちと同等に扱うことへのためらい――も無くなってくる。
直太がそれらの玩具たちで独り遊びに興じるその為方は、黒子が人形たちを操って人形劇を繰り広げるのとそうは変わらない。その中で彼はおもちゃたちに配役を行い、善玉と悪玉、敵と味方に分けたうえで、肉弾相剋つ闘争の劇を演じさせて遊ぶのが常だった。そうした役を演じるおもちゃを左右それぞれの手に持って双方を操りながら、「おのれ小生意気なガキの分際でナメおって！　俺のこの必殺技を受けてみろ！」だの、「ふんッ、何のそれしき痛くも痒くもないぞ。今度はこっちの番だ、これでもくらえエ～！」だの、「うおーッ、やられたア～！」だのと、こんな具合に、玩具たちが劇中で口にしそうな台詞を、直太ひとりでその度ごとの役になり切り、声色まで使って演じ分けるのだった。そこはチャンバラごっこと同じだった。
だが、そうした台詞の間々には、「ぎゃしぃーん、ぎゃしぃーん、ぎゃしぃーん、ずがぁーん、ずだだだぁーん……」だの、「でゅわ、でゅわわわ、でゅわわわわんッ、ぐご、ぐごごごぉーッ……」だの、「ずざッ、ぐにゅ、ぐにゅにゅにゅにゅッ、ぴっしゃあぁーん……」だのといった、一種独特の、実に変化に富んだオノマトペ――擬音語か擬態語の類――がひっきりなしに発せられるところに特徴があった。本人は至って真剣そのものだ。しかしどういうものか、独り遊びへの熱中度が増してゆくほど、その局面ごとに口を突いて出る可笑しげなオノマトペの、その巧まざる滑稽味も自ずと増してくるようだった。逆にいうと、その妙ちくりんなオノマトペの妙味が増してくるほど、直太が玩具たちを以て演

じる、あるいは演じさせる闘争の劇も白熱の度を増し、精彩や活気や迫力を帯びてくるのだった。

ただ、そうなると気になるのは、直太が己に課した使命、おもちゃの強度や耐久性を試す「じっけん」すなわち耐久実験が、児戯にかまけて疎かになるのではないかということだが、どうやら懸念には及ばぬ様子だった。たしかに、怪しい熱狂に取り憑かれた直太が、「でゅうぇい、ででぇ～い、ずわわわわア～ん……」だの、「ぎゅわ、ぎゅわわわッ、ほぎゃ、ほぎゃぎゃ、ほぎゃぎゃぎゃぎゃあ～ッ……」だの、「ずしゅん、ごふッ、きゅわ、きゅわわわわ、どぐッ、きゅわっぽんッ……」だのという意味不明の珍妙なるオノマトペを連発して独り遊びに興じているとき、件の「じっけん」の事は一時的にほぼ失念している。しかし、当の実験対象たる玩具に対しては、祖父文蔵の遺訓たる「手加減・力加減」ではないが、直太なりの適度な負荷がかけられ、その強度と耐久性が試されつつある。つまり、直太が自作自演する闘争の劇の中では、おもちゃどうしがむやみやたらとガッシャン、ガッシャン……ぶつかり合って格闘を演じさせられているが、なまやさしいやり方では、

――滅多な事じゃ壊れぬ玩具。

その最終目標へ辿り着くことなど到底覚束ないのだった。

しかし、この実験方法が重大な問題を孕んでいたことが、「じっけん」を重ねるにつれ明らかとなってきた。その問題とは、

――直太が強度や耐久性を見極め得たとおもう頃には、おもちゃたちは大抵どこかしらに損傷を負っていて、ひどい場合にはもうほとんど破壊されている。

まさにこの事であった。言い換えるなら、直太は彼の独り遊び――肉弾相剋つ闘争の劇――に夢中になり熱中し没頭するあまり、そこ迄ならまだなんとかもち堪え得るだろうという一線を、その限度をいつの間にか踏み越え、一度踏み入ったら最後引き返せぬ禁断の領域まで立ち至ってしまっているのだった。有為の「じっけん」であるはずが、ただの破壊行為という無為に終わり、そんな時はさすがにむなしくてさみしくて悔しくて堪らなかった。しかし、だからといってその事を誰かに打ち明けて慰めてもらおうなどということは、およそできっこないのだった。相手が生前の祖父文蔵くらい直太に好意的であったならともかく、それ以外の人間では説明したところでどうせ理解してはもらえず、嘘の言い訳をしていると誤解されるのがオチだということくらい、なんとなく察しがついていた。

では、そんな「じっけん」などやめてしまえばよさそうなものだが、直太には、一度決めたらとことん拘泥わり抜く頑固なところがあって、性懲りも無いといえばまことに性懲りも無いことで、むしろ、

「たったこんくれえぐれえで（この程度で）壊れよったっちゃ、つまらんばい！　どげーん手荒う扱うたっちゃ、じぇーったい壊れんごたっとが、どっかにないとかね？　あア、そ

げなとが欲しか！」
そんなふうに「滅多な事では壊れぬ玩具」への欲求をますますつのらせてゆくのだった。

【六】

直太は、自分が行う「じっけん」の事は自分自身を除く誰にも――たとえ相手が神仏であろうとも――知られてはならぬ気がしていた。
ところがそんなある日、姉の美奈子が、一重目蓋の切れ長の目で、直太の様子をジロジロ見ながら、訝しげに、
「あんたさあ、この頃なんかおかしゅうなか？」
そういって来た。
「ああ、なんがァ？」訊き返す直太。
すると美奈子は、妙な笑いを浮かべて、
「だってあんた、『ぴっしゃあぁーん』に『きゅわっぽんッ』やったっけ？　おもちゃで遊びょっときに『でゅわわわ』てろん『ほぎゃぎゃぎゃ』てろん、なんかそげな変なか事ばっかしいいよるもんやけん、自分じゃわかっていいよるとやかちおもうてくさい（自分ではわかっていっているのかなあとおもってさ）……」
直太は、きまりの悪さに皆迄いわせず、慌てるあまり半ば逆上しながら、「もおーッ、聞いとかんでぇ、せからっさ！」と大声で文句をいった。姉が持ち出して来た話題をとにかく消し去りたかった。
だが姉はしつっこかった。それも、いつも直太をからかうときの執拗さとは違って、なんだか薄気味悪そうな表情を貼り付かせた真顔を向け、探るような眼差しで、
「ねえちゃん聞いとってさ、あんたがいよいよおかしゅうなったっちゃなかろうかち、心配していうてやりよるとよ」ちょっと恩着せがましくいってから、「おばあちゃんにいうたら、実はおばあちゃんもおかしかねェち気にしとんなはったみたいで、『まるで何かに取り憑かれとるごたるもんねえ』ちいいよんなはったとよ――」
直太は、もうそれ以上は姉の詮索には応じたくないが、祖母の言い草が気に懸かって、「取り憑かるっち、なん？」
すると美奈子は、辺りをそれとなく窺う様子で、やや声をひそめて、
「あのね、あんたがもしお化けんごたっとにどん（お化けみたいなのにでも）取り憑かれとるとしたら、『拝み屋の婆しゃん』ちゅう人ば頼んで早よお祓いばしてもらわんば、後で何か悪か、恐ろしか事の起こるかもしれんごたるち、そげなふうな事らしかよ――」
「……！」話が急に怪談じみてきたようで、怖がりの直太はそれだけでもう鳥肌が立つのを覚えた――。
久代は、その鄙びた小さな城下町に住む年寄りのご多分にもれず、信心深かった。神社仏閣はもとより辻々に祀られた小さな神々に至るまで、その前を通りしな必ず礼拝せずには気が済まなかった。鍛冶屋町のお稲荷さんの境内やお堂の周

りの掃除も、彼女の毎朝の日課だった。
　そうした神仏への帰依と表裏一体をなすのが、いわゆる物の怪とか、それに取り憑かれて魔物と化した存在への恐怖感だった。彼女のいう物の怪とは、その姿が常人の肉眼には映らなくとも自然界と人間（じんかん）を太古の昔から往き来している、一種の霊的存在を意味した。そして、それが霊的な「何か」であるからには人や、その他の命ある動植物たちから器物のような無生物に至るまで、あらゆる物という物に取り憑いては魔物となし、そうした憑依現象を通して人に仇為すこともあり得るだった。
　だから、そんな物の怪の存在を信じる久代が直太の遊びっぷりを見て、その極端な、異様なまでののめり込み様に、
「うちの直ちゃんな、あら何じゃいろ（あれは何かしらの）おろ善かつにどん（善からぬ物の怪にでも。「おろ」は否定を意味する接頭語）取っ憑かれとりゃせんじゃろかね？」
　それが直太を心配することに発した言葉でも、誠人や節子に直接いうと角が立ちそうなので、このところの読書傾向として猟奇・オカルト的なものにも興味を抱きはじめていた美奈子にだけ、そっともらしたのだった。久代いわく、「そげなつ（物の怪の類）にいちばん好かれて取り憑かれやすかとは、直太ンごつ、ふだんからボケーっとちゅうか、あげなふうにボヤーっと、ボサーっとしとるごたる、小んちょか子供げなもんねぇ――」
　だから、直太が何かに魅入られたかのように、わけのわからぬ事を口ばしりながら手当たり次第におもちゃを打ッ壊し、恬として悪怯れた様子も無いのは、物の怪に憑依されて魔物と化したがゆえのふるまいではなかろうか？
「もしほんなこてそげな事なら、拝み屋の婆しゃんば頼うで、そン取り憑いとっとば祓い落してもらわんば出来んよ！」
　久代がそうおもったのもむべなるかなで、失せ物の類から毎晩の夢見が悪いといった病的な悩みに至るまで、何かしら人知を超えた問題や神懸かったような事件でも持ち上がった際の手立てとしては、誰が呼びはじめたか知らぬが、
――拝み屋の婆しゃん。
　そんなふうに呼び習わされて知る人ぞ知る存在の、経験豊富な老婆の呪術者を頼って加持祈祷してもらい解決を図るというのが、その界隈でのしきたりとなっていた。
　実は、姉美奈子の口から「拝み屋の婆しゃん」という言葉を聞いたとき、直太の中で戦慄を伴って鋭く閃くものがあった。それというのも、直太の遊び友達の中にも実際にその「拝み屋の婆しゃん」とやらの世話になった者がいたのだ。その頃になると、怖がりなのは相変わらずだが、妖怪変化や魑魅魍魎のようないわゆるお化けが絡む不思議な話、それもただ不気味なばかりでなく、どことなくナンセンス風の滑稽味が漂う説話を好むようになっていた。そんな直太だったので、その友達が話してくれた体験談にもちょっと異常なくらい強く惹きつけられたのだった。
　その体験談の主も直太に負けず劣らずふだんはぼんやりし

た子供で、家は別にあったが母親の実家である酒屋が鍛冶屋町町内にあったものだから、そこへしょっちゅう出入りしているうちに自然と直太とも顔馴染みとなって、いっしょに遊ぶようになった。直太は、もう何度もいうように基本的に怖がりで、姉の美奈子が児童書で読んだ怪談を再話して聴かそうとしただけでも、ぎゃーッと叫んで顔色を変え、両耳を塞いで端から受けつけようとしなかった。ところが、その井口辰也という子の不思議な体験談には忽ち惹き入れられ、おなじ話をその子の口から幾度聴いても聴き飽きぬどころか、むしろ何度でも聴きたがったのだった。

その日は直太だけ一人、お稲荷さんの境内にあるぶらんこに乗って揺れていたところへ、その井口辰也という干支にちなんだ名を持つ子供が、直ちゃん直ちゃんといってなんだかうれしそうに近寄って来た。そしてまず、開口一番、

「俺ィがちんぽの腫れたとばい！……」

いきなりそういったのだった。

「なんてェ？　ちんぽの……、腫れたちね？」直太が驚いて訊き返すと、

「……うん、朝起きたら、ちんぽの腫れとってくさい、ムズームズするやんね――」

「わいたァ～！」いよいよ目を丸くする、直太。「ちんぽの腫れて、ムズームズ……？」

そんな話題が気にならぬはずも無い直太だから興味津々の反応に、さっそく勢いを得た辰也が、

「まだ寝とっときから、虫にどん刺されたごつムズームズして痒かったとが、起きて便所でおしっこば放ろでんして、ようと見てみたら（放尿しようとして、よく見てみたら）、ちんぽのあーこ（赤く）なってプクーッち腫れ上がっとってくさ、痛痒うしてムズ痒うして気持ちん悪かったい。そいで、いっでんな（いつもなら）シャーッちゅうて放っとに、腫れとっけんがどうも出の悪かやんねェ……」

「うん、そいで、どげんしたァ？」ひどく好奇心をそそられる直太。

「便所からすぐ『かあちゃん、かあちゃん、ちんぽが腫れたァ……！』ちゅうて、いうたくさん（いったのさ）。そしたら、ばあちゃんもいっしょに来て、俺がちんぽばふたっで（二人で）ジロジロ見て、『あんた、こげんちんちんの腫れたつは、何ばしたつね？　また汚か手で弄繰り廻したろ？　汚か手で弄繰り廻したけん、バイ菌の入ってこげんなったとじゃなかつね？』ちゅうて訊くばってん、『うんにゃー、しとらん、俺ァ知らんばい』ちゅうたらくさん、『そげん腫れとって、虫に刺されたとでばしなかなら（虫に刺されたのでもないのなら）、そらアンタ、拝み屋の婆しゃんば頼うで来て、拝んでもろうたが良かろ――』ちゅう事になって、ばあちゃんがすぐ呼びげ行った……」

「うん、そいで、そいでェ……？」すっかり夢中になって先を促す直太。

「そしたら、うちのばあちゃんより年取ったごたる、頭ン毛の真っ白か婆しゃんの来らっしゃって、『どらァ、ちょっと見せてんねェ～』ちゅうて俺がちんぽばいっときゃ（暫く）ジーッと見とんなって、なんじゃいろ（なにかした）ぶつぶつ、ぶつぶついいよんなったばってん……」

直太は、いつの間にかおもわず自分の股間を半ズボンの上から押さえ、真剣な面ざしで聴き入っている。「で、なんちいいなはった？」

「急に俺ィが顔ばみて、『坊や、あんた、どっかそこら辺の掘割にでん、小便ば放らんやったかね？』ちゅうて訊きなはるもん、俺ァ打ッ魂消ったよ！」

辰也は、おしゃべりする勢いで唇から滴りそうになった、唾か涎をしゅるっと啜ってから、

「なんでバレたとか不思議やけど、俺が『あッ、きのう放った！』ちゅうたら、そン婆しゃんが『ほォら、そりがいかんやったとばい。掘割んごつ大事なか（大切な）場所に、小便どん放りょるごたんなら、そらぁ出来ん……、そげな事しちゃ、じぇったい出来ん！』ちいいなはるやんね、はア打ッ魂消った！」

この辰也という子供は、直太なんか比較にもならぬほどの雄弁家なのだった。そんな辰也の雄弁あるいは能弁にすっかり虜にされた直太は、「掘割に小便ば放ったけん、ちんぽが腫れたちね？」と、いよいよ好奇心の塊となって、話の先を詮索せずには気が済まない。「なんね、どげな事ね？」

辰也は、よくぞ訊いてくれたとでもいいたげな顔で、

「俺ァ自分でん忘れとったばってん、そン前の日に遊うでさるきょったら、帰りに小便ば放ろうごんなってくさん（遊び歩いていたら、帰りに小便がしたくなってさぁ）、為被ちゃいかんけん（そのまま漏らすわけにもいかず）、堀端ン柳の木の下から、ジョロジョロジョロ……ち水ン中ぇ放ったよ。そン事ば正直にいうたら、『あいーたァ、そいーが、いかんやったとばい！　掘割に小便ば放るてろん、そげな事ばすんなら掘割に棲んどんなはる水の神様の腹掻かっしゃる（お怒り召される）に決まっとろが！　坊やがそげな掘割の水ば不浄な小便で汚すごたる悪さばしたけんが、水の神様の腹掻かかっしゃって神罰ば当てらっしゃって、そいで、そげんちんちんの腫れたとたい――』ち、そげん拝み屋の婆しゃんのいいなはったもん！――」

「……！」ただただ呆然とする直太。

その内海のほとりに開けた鄙びた小さな城下町は、

――水郷。

そう呼ばれるとおり、古来、街ぢゅう至るところに掘割が廻らされていた。その掘割には、なにぶん海辺のこととて地下水脈からは真水が得難い土地柄、井戸を掘る代わりに人工水路を通して、近郊を流れる矢部川の上流域から引いて来られた水が湛えられ、人々はその清浄な真水を汲み置きして生活用水に充ててきた。だから、この街に住む人々にとって掘割に湛えられた水は生存条件を満たすという意味での、文字

どおり「命の水」なのだった――。
　ところが、そんな水郷地帯にも高度経済成長の余波が及んだ。すると、生活の隅々まで浸透して来た工業化のあおりで、気高き掘割の水も忽ち汚染が進んだ。炊事洗濯に使えぬどころか、とくに市街地の生活排水が流れ込むところはヘドロの堆積で水流が滞り、かなりの部分ドブと化してしまっていた。
　だがしかし、掘割の水を神秘的な対象として貴ぶ伝統的精神だけは、まだかろうじて残喘を保っていた。したがって、その水を穢すような行為は依然として禁忌であり続けていた。水の神様に供物を捧げるしきたりなども、細々とだが行われていた。また、なにかに思い屈して心が疲れたようなときにも、「はあ〜、術無さァ」などと溜息まじりに呟きながら堀端に出て、水面に、その微かな流れに視線を浮遊させて、ぼんやりと眺め入る。そうして暫く過ごすうちには、気が晴れるとまでいわぬが心の重石が幾分かでも軽くなった気がするのだった。掘割に湛えられた水は彼らの心の拠り所であり、「水郷」という言葉自体も、各自が生活体験の積み重ねを通じて郷土愛を自覚する契機となり得た。そうした人々の思いを象徴するように、沖端の漁村地区に永く祀られてきた「水天宮」が依然として信仰を集め、初夏には年に一度の祭礼も催されているのだった――。
　そんな水郷の街に育つ直太は、また浄土宗のお寺の幼稚園で地獄極楽図を前に教わった因果応報の掟を想い起こしていた。天知る地知る、天網恢恢疎にして漏らさず、天罰てきめん……。誰も見ていないようでも実は、神様・仏様は我ら人間の為す行いを天上界から逐一ご覧になっていて、善い行いには褒美を、逆に悪い行いには懲罰をと、その善悪に応じた報いを下されるものだ――。
　そんな教えが、ただの訓話では終わらずに、その井口辰也という子の体験談というかたちで具現化されたのだった。直太には、その辰也の体験談がただの他人事とは到底おもえず、己が身に生々しく肉迫して来るとともに、驚愕と戦慄を禁じ得なかった。
「そりから、どげんなった？　ねえ、辰ちゃんのちんぽ、どげんしたつね？」真剣そのものといった面持ちで、さらにその先を促すと、
「拝み屋の婆しゃんのいわすごつ、俺ィ家の近くの堀端に机ンごたっとば置いて、そン上にお供え物ば、お菓子てろん果物てろん、お酒てろんお米てろん野菜てろん、何じゃいろカンじゃいろ、こげんいっぱい山盛りにしてからくさ……」辰也の身振り手振りが、よりいっそう直太を惹きつけた。「そン前で、拝み屋の婆しゃんの、昔の偉か人の着るごたる立派な着物ば着て、神社の神主さんのごつ、竹の棒の先っちょに白か紙のギザギザしたつの付いたとば、こげなふうに手に持ちなはってから、シャカッ、シャカッ……ちこげなふうに……」ふだんは剽軽な辰也が、その時ばかりはまたずいぶんと真面目くさった、しかつめらしい表情で、御幣を振るう所作を真似て見せながら、「シャカッ、シャカッ……シャカッ、

シャカッ、シャカッ……ち振ったくんなって、ようわからん呪文のごたっとばムニャムニャムニャ、ムニャムニャムニャ……ち唱えよんなった。俺も、『もうこれで赦してはいよオ（赦してくださいませ）！　二度とあげなとこり（あんなところに。ここでは掘割を指す）小便やら放りまっしぇんけんがら、勘弁してはいよオ……！』ちゅうて、必死で謝ったくさん。『掘割の水ンなけ（中へ）小便ば放るごたる、そげな悪さは、もうじぇったいしましぇ～ん！』ちゅうて。そしたら……」話し上手なばかりかサービス精神も旺盛な彼は、頼まれもせぬのに半ズボンとパンツをわざわざずり下げて、股間の小さな一物をぴろんと自ら披露すると、「ほらッ、見てん、治った、治った！　俺ィがちんぽ、こげん治ったとばい！」現物を示しながら、腫れ上がっていたときにはここがこう、こんな感じにこれくらい膨らんで、痛痒くてムズムズしたのが、呪術者の老婆が加持祈祷してくれたおかげで、「ほらッ、こげん元に戻ったとばい！　ねえ、凄かろ？　ねえねえ、凄かろがア？――」得意満面で祈祷の効果を披露あるいは喧伝してくれたのだった。

「ふうーん、やっぱしほんなこて水の神様ち居んなはっとたいねえ……」直太はひたすら深く感じ入っていた。

その神様の存在が、辰也が掘割の水の中に放尿したことに対する神罰というかたちで証明されたことが、直太に強かな衝撃を与えていた。しかも辰也のその体験談には、幼稚園での因果応報にまつわる話以外にもいささか、直太の記憶に直接訴えかけ、琴線に触れて来るものがあった。その記憶とは、祖父文蔵が生前に連れて行ってくれた、水の神様である水天宮社の祭りの想い出だった。

その祭では、もちろん御社の中では神職が太鼓を叩いて祝詞を奏上するのだが、すぐ脇の水路には、どんこ舟を幾艘もつなげて設えた船舞台が浮かべられた。そしてその上では、旅廻り一座による芝居も演じられたが、やはり呼び物は御神楽の一種である「おらんだ囃し」だった。笛太鼓によって独特の陽気で朗らかな節まわしを持つ「おらんだ囃し」が奏でられ奉納されるとき、祭りは佳境を迎える。また、その水路の両岸には仰山の露店が軒を連ね、水温み風薫る候の陽気に誘われた善男善女が引きも切らず押し寄せ、彼らの往来で昼夜を分かたず賑わう。とくに夜は船舞台の灯りが水面に照り映えて、美しい夢でも見ている気分に誘われる。

直太にとって、そのお祭りの記憶は端々が朧げで、印象深かった部分でさえ断片的ではあったものの、その時の祭神が辰也に祟ったとおなじ「水の神様」だったことが想い合わされるにつけ、

――あの神様の神罰が当たった！

その事、すなわち神の祟りというものが急に現実味を帯びて感じられてきた。そして、水の神様ばかりか仏様なども含めた広い意味での神様たちが、掘割の水の中も含めた街ぢゅう至るところに居られ、直太のすること為すことも、逐一御覧になっている気がしてくるのだった。

辰也の反省の弁によると、「どこで何ば為ょったっちゃ、誰も見とらんごつして、神様はちゃーんと見とんなはっとげなばい。そしけんがらくさ（だからさあ）、悪か事どんこそっと（こっそりと）為よったっちゃ、神様にゃじぇーんぶ（全部）バレとって、じぇーったい神罰の当たっとげなばい。だけん、ほら、俺がちんぽも腫れたろが――」

さすが身を以て体験しただけのことはあって、ただの訓話とは重みが、説得力が違う。そのため、直太も自ずと我が身を省みる心持ちにさせられた。それにくわえ、「拝み屋の婆しゃん」と呼ばれる呪術者の存在も、直太の中に印象鮮やかに刻みつけられたのだった。

姉美奈子の口から祖母久代からの伝聞として、「直太が度々おもちゃを壊すのも、なにか善からぬ物の怪の類が直太に取り憑いて、彼を操って為さしめる破壊行為ではないのか」とか、「もしそうなら『拝み屋の婆しゃん』と呼ばれる呪術者の老婆に頼んで加持祈祷してもらい、直太に取り憑いた物の怪を祓い落してもらわねばならぬ」といった内容の事が語られるにつけ、直太の背筋をゾクッとする戦慄の感覚がはしった。そして、その「拝み屋の婆しゃん」云々を聞いたときには必ず条件反射で、井口辰也という友達の、掘割の水を放尿によって穢し水の神様の怒りを買って、陰茎が腫れる神罰が当たったという体験談が想い起こされた。すると直太の中では、

――神罰を被ることすなわち陰茎が腫れること。

こんな等式が出来上がってしまい、直太の「じっけん」すなわち耐久実験も、そんな行為を続けていてはゆくゆくは……という不安が兆すこととなった。だから、なおいっそう、「勿体なか事ば為ょったら、いつかほんなこて神罰の当たるけんね！」

そんな祖母からの訓戒の言葉が、直太をしょっちゅう脅かすようになった。

――俺はただ壊れんおもちゃが欲しかだけン事っで、けっして壊そうごつして（壊したくて）壊すとじゃなかばってん、こげな「じっけん」ばずっと為ょったら、俺がちんぽも腫るっとやなかろうか？

とはいえ、直太がその模型玩具を敵味方あるいは善悪正邪に分けて闘争の劇を演じさせる独り遊びにどっぷり浸って、なおかつその「じっけん」にのめり込んでいるときというのは、つい、なのか、然るべくして、なのか、とにかく祖母からの訓戒など忘れていた。盲人蛇に怖じずではないが、遊びにひたすら没頭し、それ以外全てお留守といった状態になっている直太にとっては、そんな訓戒などむしろ失念していて当然なのだった。

だが、そうして闘争の劇を演じさせて遊ぶうち、怪獣や戦闘ロボットの模型玩具がまた例のごとく脆弱性をさらけ出して壊れたときなど、ふと、

――ちんぽが腫れはせんじゃろか？

その辰也という友達の体験談を聴いて以来、直太にとって神罰仏罰の類といえば、専らそれなのだった。もうそれ以外は想い浮かばないのだった。

だが、直太には直太なりの、正義とはいわぬが、止むに止まれぬ切実な悲願があった。

――壊しとうて壊しょっとじゃなかもん！　壊れんおもちゃば探そうで為ょっとやん！

そう、滅多な事では壊れぬ、とにかく頑丈なおもちゃを我が手に！　そのためにこそ例の「じっけん」でおもちゃを篩にかけ、すぐ壊れる脆弱なのを振るい落としているのだ、と。

ついでに、こうも独り合点しているのだった。

――こげん壊れやすうして、もちの悪ァーるかおもちゃばァーかり造りょっとは、またすーぐ新しかとに買い換えさすっ魂胆じゃろ。そげなこォすか（ずるい）事ばしてでん金儲けの出来っとが良かァぐらいおもいよるインチキな奴が、ほんなもん（本物）の神罰当たりじゃっか！

なのに、大して罪も無いか有っても微罪であるはずの直太の側にだけ神罰が当たるのだとしたら、

――そらおかしか！　神様でん仏様でん、そげなインチキな奴の魂胆ば見破れんな、ころっと騙されとるごたるふうなら、俺ァ、もう拝まんばい……。

この幼児と来たら、彼の勧善懲悪的な文脈に照らして、そんな罰当たりな事も考えたりした。かとおもうと、

――あアー、神様でん仏様でん良かけんがら、ほんなこて居んなはっとなら、お願いやけん、じぇーったい壊れんごたるおもちゃに出逢ゆっごつして欲しかァ！　じぇーったい壊れんごたるおもちゃに出逢うたら、直太、じぇーったい壊さんごつ大事に為っとに！

絶対に壊れぬほど頑丈な玩具なら、殊更大事にせずともよさそうなものだが……。そんな理屈も通じないほど、酷使にも耐え抜き、滅多な事では壊れぬ玩具との出逢いに憧れる直太が、ついこないだ買って貰ったばかりのおもちゃに脆くも壊れられ、さすがに憮然としているようなときに限って、耳元で、

「おぉーい、直太ァ、まぁちぃった（もうすこしは）オマエ、手加減して、力ば加減して遊ばやこてぇ（遊ばなくちゃ）……」またあの祖父文蔵の遺訓が、低く柔らかく響くのだった。まるで直太が意気阻喪している、その弱みを突いて来るように。「……ほーら見てみん、手加減ば、力加減ば為ぇんな、かんめ無し（構え無し。なんの配慮も無く、の意）為っけんがら、また壊れたろうがア――」

そんな祖父文蔵の囁き声も、「じっけん」の最中には耳に入って来ない。独り遊びで演じられる闘争の劇に、全意識を持って行かれているせいか、夢現でうわ言みたいに口走る、例の珍妙なオノマトペに掻き消されるせいか、それとも……？　そんな事はやってる本人の直太にすらわからぬ。ただ、おもちゃが脆弱さを、もちの悪さを露呈させて壊れ、げんなりした直太が、

――また壊れた……！
落胆を、失意をかこっているようなときに限って、
「いっでん（いつも）いいよろうが、なア直太。物は大事に扱えば長もち為っぱってん、かんめ無し手荒う扱うと壊るっとぞ……」
いつものことだから、「そげな事ぁわかっとる！」と苛立つ直太。「じいちゃーん、何べんいうたらわかるとね？　直太ねえ、まだ子供やけんがら、そげな手加減やら力加減やら為ぃきらんもん！　ち、そげん何べんでんいうたやん……」
生意気にも抗弁する直太。「そげな加減やら厭やん……、そげな事して遊んだっちゃ、いっちょんおもしでんなか（ちっともおもしろくなんかない）！」
それより、今の直太にとって気懸かりなのは、
――辰ちゃんがごつ、俺ィがちんぽも腫るっとやなかろうか……？
その事なのだった。
「じいちゃーん……」
「うん？」
「直太がこげんおもちゃで遊びょっと、おもちゃがじぶんで壊るっやんね」
「うん。だけん壊れんごつ、手加減しぇろち、力ば加減して遊べち、いっつもいいよろうが」
「うんにゃ、そげんじゃのうして（そうじゃなくって）……」苛立つ直太。彼が目下気懸かりなのは専ら、「おもちゃば壊したっちゃ……、うんにゃ、遊びょっておもちゃが壊れたっちゃ、直太がちんぽ腫れんよね？」
その時、直太が期待した答えは、文蔵に、
――そらぁオマエ、おもちゃば壊したっちゃ、なんの、ちんぽの腫うね！　腫るっもんか！　もしほんなこて腫るっちいうなら、もう疾うのむかしに、こう腫れ上がっとらにゃいかんめえもん。そうじゃろが？
そういって不安を一蹴し、雲散霧消させてもらいたいのだった。
ところが文蔵は、「なんでや？」とその質問の意図を詮索するでもなく、ただなんとなくその意図は察しがついているような口ぶりで、「ほら、そげな要らん心配ばせやんごたんなら（そんな無用の心配もしなくちゃならないくらいなら）、じいちゃんがいっつもいうごつ、壊さんごつ手加減して遊べばよかろうが。そしたら、なーんの心配も要ろうかい。力ば加減して、おもちゃば壊さんごつ遊ばなつまらんゾち、いっつもいいよろうが……」
その刹那、直太の胸元で突っかえていたモシャクシャが、カアーッと頭に血が昇った弾みで爆ぜ、口からスポーンと飛び出す感じで、
「もう、そげんいうけん、じいちゃん好かんちいうたろ！　手加減やら力加減やらばっかりいうたっちゃ、直太、厭やん！　直太、もうじいちゃんやら、好かァ～ん！　あっかんべえェ～！」

すると文蔵は、またあの、鉄の刀を持つお寺のじょっちゃんこと小宮山浄海と葦の生い茂った沖端川の河原で、チャンバラごっことはいいながらかなり本気でやり合った帰り道での時と同じように、苦笑する声だけ残し、踵を返して歩み去って行くようだった。しかし、その気配は遠のいても、直太の鼻孔に煙草とポマードの残り香だけが微かに、仄かに漂っているようだった。

――あア、まーたいい過ぎた。「もうじいちゃんやら好かァ～ん」てろんな、いわんとよかった……。

後悔していた。いつもそうだが、どうして自分はこうよく考えもせず、一時の気分まかせに軽弾みな事をいってしまうのだろうか？　直太を思いやればこその忠告とはわかっているのに、ヤレ手加減をして遊べだの、ヤレ力加減が大事だのといわれると、つい依怙地になって反発してしまうのだった。

しかし、もっと厄介なのは、祖母久代や姉美奈子から、

「あら何じゃいろおろ善かつにどん取っ憑かれとりゃせんかね？」

直太がすぐに物を壊すのも、何かしら質の善くない物の怪にでも取り憑かれているのではなかろうか、と怪しまれたり疑われたりしている、その事だ。友達の辰也が掘割に粗相をして、水の神様の神罰が当たって小さな陰茎が腫れ上がったように、直太自身もそうなって「拝み屋の婆しゃん」の世話になるような羽目に陥ることだけは、何としても避けたかった。

その事だけ考えると、最も手っ取り早い方法は、件の「じっけん」からも、例の闘争の劇からも、つまり直太の独り遊びごと、そこから潔く足を洗ってしまうことだった。しかしそれでは毎日がつまらなくなって、ほんとうに退屈の病気にでも罹って、自分を持て余した挙句に死んでしまいそうな気さえする、直太だった。

かくして直太の「じっけん」はその後も続いた。だが幸いな事に、直太の躰のうちどこかが腫れ上がって、呪術者の世話になるようなことは起こらなかった。つまり、その不安自体は杞憂に過ぎなかったのだ。だがその代わり、直太に弄繰りまわされた物たちには、やはり災難だった。どこかを壊されておもちゃ箱の中の同類たちに埋もれてゆくという、悲惨な末路が待ち構えていたのだから。

直太の物を壊す癖、その悪癖をめぐる数々の波乱が前途に待ち受けていそうだった――。

（『じっけん』の後篇につづく）